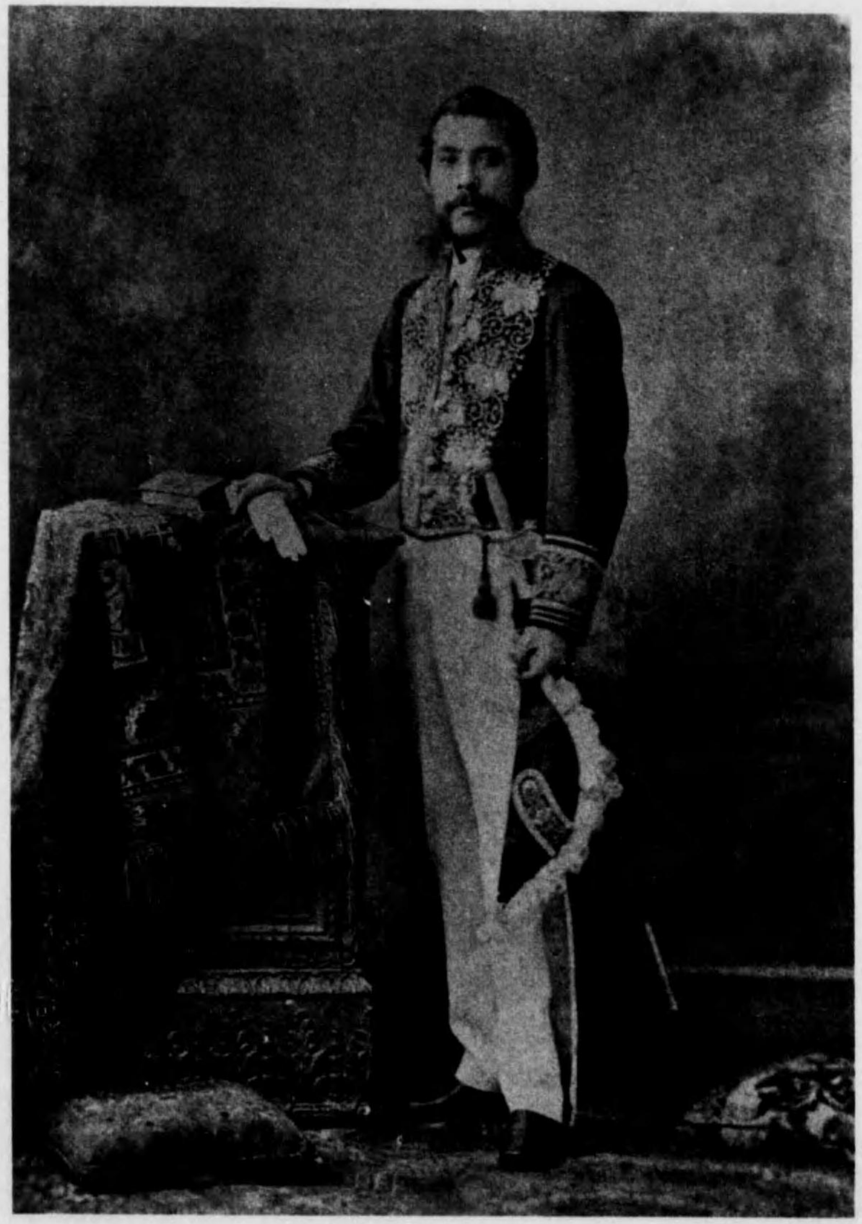
64-244
1200501278101
64
44

10U-15

大久保利通文書

忠重畧

四庫全書
籍縹緗室



肖像　（明治六年佛國巴里ニ於テ撮影）

64-244

大久保利通文書第九目次

卷四十四

一六一三　伊藤博文への書翰　明治十一年正月十日　一頁
一六一四　得能良介への書翰　明治十一年正月十二日　二
一六一五　駒場農學校開場式に奏上の祝詞　明治十一年正月廿四日　三
【參考】其一　駒場農學校開校式勅語　明治十一年正月廿四日　四
【參考】其二　速水堅曹談話「利通ト船津傳次平」　五
一六一六　伊藤博文への書翰　明治十一年正月廿六日　七
一六一七　岩倉公への書翰　明治十一年正月廿九日　八
一六一八　岩倉公への書翰　明治十一年正月廿九日　一〇
一六一九　岩倉公への書翰　明治十一年二月二日　一一

一六二〇　松田道之への書翰　明治十一年二月三日　一二
一六二一　重野安繹への書翰　明治十一年二月六日　一三
一六二二　三條・岩倉両公への書翰　明治十一年二月七日　一四
【参考】其一　千住製絨所の創立　一六
【参考】其二　男爵大倉喜八郎談話「大久保公と毛織事業」　一九
一六二三　得能良介への書翰　明治十一年二月八日　二五
一六二四　重野安繹への書翰　明治十一年二月九日　二六
一六二五　岩倉公への書翰　明治十一年二月十日　二六
一六二六　佐々木長淳への書翰　明治十一年二月十日　二七
【参考】佐々木長淳談話「故大久保公の蠶絲業奬勵」　二九
一六二七　伊藤博文への書翰　明治十一年二月十一日　三二
一六二八　賞典祿獻納願　明治十一年二月十六日　三二
【参考】大隈大藏卿の回答書　三五

一六二九　岩倉公への書翰　明治十一年二月十八日　三六
一六三〇　岩倉公への書翰　明治十一年二月廿一日　三七
一六三一　岩倉公への書翰　明治十一年二月廿二日　三七

卷四十五

一六三二　三條公への伺書　明治十一年三月六日　三九
一六三三　三條公への伺書　明治十一年三月七日　五五
【参考】其一「安積疏水志」抄　七八
【参考】其二　大藏卿松方正義安積疏水開通式祝詞　八〇
【参考】其三　公爵松方正義談話「大久保公と安積疏水」　八二
【参考】其四　松方正義安積疏水志奉呈表　明治三十九年正月　八四
【参考】其五　安積開墾地ノ經營　八七
一六三四　三條公への伺書　明治十一年三月十一日　九二
一六三五　河瀨秀治への書翰　明治十一年三月十三日　九五

【參考】其一　河瀬秀治より大久保への書翰　明治十一年三月十三日　九六
【參考】其二　河瀬秀治談話「大久保公内治の方針」　九六
一六三六　三條公への願書　明治十一年三月十四日　九九
一六三七　岩倉公への書翰　明治十一年三月十五日　一〇〇
一六三八　伊藤博文への書翰　明治十一年三月十五日　一〇一
一六三九　中井弘への書翰　明治十一年三月十五日　一〇三
一六四〇　楠本正隆への書翰　明治十一年三月十五日　一〇三
一六四一　伊藤博文への書翰　明治十一年三月十六日　一〇五
一六四二　伊藤博文への書翰　明治十一年三月十九日　一〇六
一六四三　三條公への屆書　明治十一年三月廿日　一〇六
一六四四　岩倉公への書翰　明治十一年三月廿日　一〇七
【參考】楠本正隆より大久保への書翰　明治十一年五月六日　一〇九
一六四五　伊藤博文への書翰　明治十一年三月廿一日　一一〇
一六四六　前島密への書翰　明治十一年三月廿一日　一一五
一六四七　税所篤への書翰　明治十一年三月廿一日　一一六
一六四八　伊藤博文への書翰　明治十一年三月卅一日　一一八
一六四九　金井之恭への書翰　明治十一年三月卅一日　一一九
一六五〇　覺書　明治十一年三月　一二〇
一六五一　岩倉公への書翰　明治十一年四月三日　一二二
【參考】其一　三條公より岩倉公への書翰　明治十一年四月朔日　一二五
【參考】其二　岩倉公より大久保への書翰　明治十一年四月四日　一二六
【參考】其三　岩倉公より大久保への書翰　明治十一年四月四日　一二九
【參考】其四　岩倉公より大久保への書翰　明治十一年四月七日　一三一
一六五二　三條公への願書　明治十一年四月四日　一三二
一六五三　伊藤博文への書翰　明治十一年四月八日　一三二
一六五四　金井之恭への書翰　明治十一年四月八日　一三三

一六五五　三條公への屆書　明治十一年四月八日　一三四
一六五六　中井弘への書翰　明治十一年四月九日　一三五
一六五七　三條公への屆書　明治十一年四月十一日　一三五
一六五八　伊藤博文への書翰　明治十一年四月廿四日　一三六
【參考】男爵前島密談話「夢平閑話」抄　一三七
一六五九　前島密への書翰　明治十一年四月廿四日　一四〇
【參考】起業公債證書發行ニ付具視衆華族ヲ勸誘スル事　一四〇
一六六〇　岩倉公への書翰　明治十一年四月廿六日　一四二
【參考】岩倉公より大久保への書翰　明治十一年四月廿六日　一四三
一六六一　本田親雄への書翰　明治十一年四月廿八日　一四四
一六六二　本田親雄への書翰　明治十一年四月廿九日　一四五
一六六三　岩倉公への書翰　明治十一年四月卅日　一四五
一六六四　岩倉公への書翰　明治十一年五月三日　一四八
【參考】岩倉公より大久保への書翰　明治十一年五月二日　一五〇
一六六五　五代友厚への書翰　明治十一年五月十一日　一五〇
一六六六　伊藤博文への書翰　明治十一年五月十二日　一五一
一六六七　岩倉公への書翰　明治十一年五月十三日　一五二
【參考】岩倉公大久保利通絶筆書翰跋　明治十一年八月　一五三
一六六八　伊藤博文への書翰　明治十一年五月十四日　一五五
【參考】公爵伊藤博文談話「大久保公絶筆の書翰に就て」　一五五
一六六九　御巡行沿道の各縣ゟ内示の大意　明治十一年五月十四日　一五七
一六七〇　濟世遺言　明治十一年　一六三
【參考】楠本正隆より大久保への書翰　明治十一年五月十三日　一七二

大久保利通文書補遺

卷四十六

一六七一　森山與兵衛への證文　嘉永四年六月廿八日　一七三
一六七二　森山與兵衛への證文　嘉永四年六月廿八日　一七四
一六七三　石原直左衛門への書翰　嘉永六年六月四日　一七五
一六七四　石原直左衛門への書翰　嘉永六年十一月三十日　一七六
一六七五　堀次郎への書翰　文久二年五月二日　一七七
一六七六　藤井助市への書翰　元治元年三月十一日　一七八
一六七七　藤井助市・石原直左衛門・同正右衛門への書翰　慶應三年四月十三日　一八〇
一六七八　小松帶刀への書翰　慶應三年八月廿三日　一八五
一六七九　船越洋之助への書翰　慶應三年九月十一日　一八九
一六八〇　西郷隆盛への書翰　慶應三年十二月二日　一九〇
一六八一　西郷隆盛への書翰　明治元年四月廿三日　一九一
一六八二　鴻雪爪への書翰　明治元年五月十一日　一九五
一六八三　得能良介への書翰　明治元年六月三日　一九六
一六八四　覺書　明治元年　明治二年六月九日　一九七
一六八五　岩倉公への書翰　明治二年十月八日　一九七
一六八六　新納嘉藤二への書翰　明治二年八月廿四日　一九八
一六八七　德大寺實則への書翰　明治二年十月十四日　一九九
一六八八　伊集院直右衛門への書翰　明治二年十二月廿八日　二〇一
一六八九　藤井助市・石原直左衛門への書翰　明治三年三月二日　二〇二
一六九〇　松方正義への書翰　明治三年四月廿日　二〇四
一六九一　得能良介への書翰　明治三年四月廿八日　二〇七
一六九二　參議への書翰　明治三年七月十四日　二〇八
一六九三　吉井友實への書翰　明治三年七月廿九日　二〇九
一六九四　佐々木高行への書翰　明治三年八月廿五日　二〇九
一六九五　岩倉公への書翰　明治三年閏十月廿九日　二一〇
一六九六　松方正義への書翰　二一一

一六九七　岩倉公への書翰　明治三年十二月十五日　二一二
一六九八　吉井友實への書翰　明治四年二月三十日　二一三
一六九九　山縣有朋への書翰　明治四年三月十三日　二一四
一七〇〇　山縣有朋への書翰　明治四年三月廿四日　二一五
一七〇一　山縣有朋への書翰　明治四年三月廿六日　二一七
一七〇二　山縣有朋への書翰　明治四年四月廿一日　二一八
【參考】山縣有朋より大久保への書翰　明治四年四月廿一日　二一九
一七〇三　山縣有朋への書翰　明治四年四月廿四日　二一九
一七〇四　門脇少造への書翰　明治四年六月廿六日　二二〇
一七〇五　井上馨への書翰　明治四年八月廿四日　二二一
【參考】山縣有朋より井上馨への書翰　明治四年十二月八日　二二三
一七〇六　覺書　明治四年　二二四
一七〇七　黑田清隆への書翰　明治六年六月八日　二二六
一七〇八　宮島誠一郎への書翰　明治六年八月二日　二三〇
【參考】宮島誠一郎より大久保への書翰　明治六年七月廿八日　二三〇
一七〇九　宮島誠一郎への書翰　明治六年九月五日　二三〇
一七一〇　宮島誠一郎への書翰　明治六年十月十九日　二三一
一七一一　岩倉公への書翰　明治六年十月廿八日　二三三
一七一二　覺書　明治七年七月　二三六
一七一三　伊藤博文への書翰　明治八年二月三日　二三七
一七一四　伊藤博文への書翰　明治八年二月八日　二三七
一七一五　稅所篤への書翰　明治八年二月廿日　二三八
一七一六　稅所篤への書翰　明治八年三月四日　二三九
一七一七　家祿奉還に關する建議書　明治八年三月卅日　二四二
一七一八　松方正義への書翰　明治八年五月五日　二四五
一七一九　稅所篤への書翰　明治八年五月廿一日　二四五

一七二〇　山縣有朋への書翰　明治八年五月廿三日　二四八
一七二一　杉浦讓への書翰　明治八年八月二日　二四九
一七二二　伊藤博文への書翰　明治八年十一月廿一日　二五〇
一七二三　岩倉公への書翰　明治八年十二月廿二日　二五一
一七二四　村田氏壽への書翰　明治八年十二月廿一日　二五二
一七二五　覺書　明治八年　二五三
一七二六　山縣有朋への書翰　明治九年正月十七日　二五四
一七二七　琉球藩への内達案　明治九年二月　二五五
一七二八　村田氏壽への書翰　明治九年三月九日　二五六
一七二九　巖谷修への書翰　明治九年三月十日　二五七
一七三〇　松方正義への書翰　明治九年七月廿九日　二五八
一七三一　山縣有朋への書翰　明治九年十一月朔日　二五九
【參考】山縣有朋より大久保への書翰　明治九年十一月朔日　二六〇
一七三二　山縣有朋への書翰　明治九年十一月朔日　二六〇
【參考】山縣有朋より大久保への書翰　明治九年十一月朔日　二六二
一七三三　山縣有朋への書翰　明治九年十一月朔日　二六二
【參考】山縣有朋より大久保への書翰　明治九年十一月朔日　二六三
一七三四　黑田清隆・川村純義への書翰　明治九年十一月六日　二六四
一七三五　黑田清隆への書翰　明治九年十一月六日　二六五
一七三六　重野安繹への書翰　明治九年十一月十四日　二六五
一七三七　重野安繹への書翰　明治九年十一月十五日　二六六
一七三八　覺書　明治九年　二六七
一七三九　覺書　同上　二六七
一七四〇　岩倉公への書翰　明治十年正月七日　二六八
一七四一　岩倉公への書翰　明治十年正月十日　二六八
一七四二　木戸孝允への書翰　明治十年正月十八日　二六九

一七四三　佐々木高行への書翰　明治十年六月十八日　二七〇
【參考】其一　佐々木・北村より三條・大久保・伊藤・西郷への書翰　明治十年六月十五日　二七一
【參考】其二　佐々木高行より三條・大久保・伊藤への書翰　明治十年六月廿八日　二七二
【參考】其三　西郷從道より佐々木・北村への書翰　明治十年六月　二七四
一七四四　佐々木高行・北村重頼への書翰　明治十年七月六日　二七五
【參考】北村重頼・佐々木高行よりの書翰　明治十年七月十一日　二七六
一七四五　伊藤博文への書翰　明治十年七月十六日　二七七
【參考】九鬼隆一より大久保・伊藤への書翰　明治十年七月十日　二七八
一七四六　佐々木高行・北村重頼への書翰　明治十年七月廿九日　二七九
一七四七　伊藤博文への書翰　明治十年八月十九日　二八一
一七四八　船越衛への書翰　明治十年十一月廿五日　二八二
一七四九　佐々木高行への書翰　明治十年十二月三日　二八三
一七五〇　覺書　明治十年　二八三

卷四十七　（年代不明ノ文書）

一七五一　三條公への書翰　二月十七日　二八五
一七五二　岩倉公への書翰　四月九日　二八五
一七五三　岩倉公への書翰　四月廿六日　二八六
一七五四　岩倉公への書翰　五月廿三日　二八七
一七五五　岩倉公への書翰　八月九日　二八七
一七五六　岩倉公への書翰　八月廿一日　二八八
一七五七　岩倉公への書翰　九月廿三日　二八九
一七五八　岩倉公への書翰　十二月卅一日　二八九
一七五九　伊達宗城への書翰　四月廿四日　二九〇
一七六〇　伊達宗城への書翰　四月三十日　二九〇
一七六一　伊藤博文への書翰　五月廿五日　二九一
一七六二　伊藤博文への書翰　八月五日　二九一

一七六三　伊藤博文への書翰　十二日　二九二
一七六四　伊藤博文への書翰　廿七日　二九三
一七六五　黒田清隆への書翰　八月十三日　二九三
一七六六　黒田清隆への書翰　十一月廿日　二九四
一七六七　松方正義への書翰　十一月廿八日　二九四
一七六八　寺島宗則への書翰　正月十五日　二九五
一七六九　寺島宗則への書翰　正月十六日　二九六
一七七〇　寺島宗則への書翰　四月十日　二九六
一七七一　佐々木高行への書翰　九月十五日　二九七
一七七二　吉井友實への書翰　二月廿一日　二九八
一七七三　吉井友實への書翰　四月七日　二九八
一七七四　吉井友實への書翰　五月三日　二九九
一七七五　吉井友實への書翰　五月四日　三〇〇

一七七六　吉井友實への書翰　五月廿六日　三〇〇
一七七七　吉井友實への書翰　六月二日　三〇一
一七七八　吉井友實への書翰　六月廿八日　三〇一
一七七九　吉井友實への書翰　八月十一日　三〇二
一七八〇　吉井友實への書翰　八月十七日　三〇二
一七八一　吉井友實への書翰　八月廿四日　三〇三
一七八二　吉井友實への書翰　九月十七日　三〇三
一七八三　吉井友實への書翰　十一月五日　三〇四
一七八四　吉井友實への書翰　十一月十三日　三〇四
一七八五　吉井友實への書翰　十二月十六日　三〇五
一七八六　吉井友實への書翰　十四日　三〇六
一七八七　西郷從道への書翰　七月三日　三〇六
一七八八　前島密への書翰　二月廿七日　三〇七

一七八九　五代友厚への書翰　四月十七日　三〇七
一七九〇　五代友厚への書翰　六月廿二日　三〇八
一七九一　五代友厚への書翰　六月廿五日　三〇八
一七九二　五代友厚への書翰　十二月廿三日　三〇九
一七九三　得能良介への書翰　四月十三日　三一〇
一七九四　得能良介への書翰　四月十四日　三一〇
一七九五　得能良介への書翰　五月廿六日　三一一
一七九六　得能良介への書翰　五月　三一二
一七九七　得能良介への書翰　八月十九日　三一二
一七九八　得能良介への書翰　十二月廿七日　三一三
一七九九　得能良介への書翰　廿六日　三一四
一八〇〇　中井弘への書翰　四月十三日　三一五
一八〇一　中井弘への書翰　四月十六日　三一五

一八〇二　中井弘への書翰　五月廿七日　三一六
一八〇三　中井弘への書翰　七月十四日　三一七
一八〇四　中井弘への書翰　十二月九日　三一七
一八〇五　川路利良への書翰　二月四日　三一八
一八〇六　大山巖への書翰　二月十五日　三一九
一八〇七　岸良兼養への書翰　六月五日　三二〇
一八〇八　重野安繹への書翰　正月廿五日　三二〇
一八〇九　重野安繹への書翰　二月五日　三二一
一八一〇　重野安繹への書翰　二月十一日　三二二
一八一一　重野安繹への書翰　三月廿五日　三二二
一八一二　重野安繹への書翰　四月廿九日　三二三
一八一三　重野安繹への書翰　十月廿一日　三二三
一八一四　重野安繹への書翰　十二月十二日　三二四

一八一五　重野安繹への書翰　十六日　三二五
一八一六　石井省一郎への書翰　三月三日　三二五
一八一七　金井之恭への書翰　六月九日　三二六
一八一八　宮里新一郎への書翰　八月七日　三二七
一八一九　東京府知事參事への書翰　二月廿四日　三二七
一八二〇　石原近義への書翰　三月十二日　三二八
一八二一　石原近昌・近義への書翰　九月十九日　三二八

卷四十八

（甲東詩歌集）

大久保利通日記補遺

嘉永元年正月元日ヨリ同年二月十一日ニ至ル　三五七
嘉永元年六月朔日ヨリ同年同月晦日ニ至ル　三八六
嘉永元年十月朔日ヨリ同年同月晦日ニ至ル　三九四
嘉永元年十一月十日ヨリ同年同月晦日ニ至ル　四〇六

大久保利通文書附錄

卷上

一　利通遭難及葬儀に關する屆書　明治十一年五月十四日　四一五
二　宮内省記錄及太政官達　明治十一年五月十四日　四一六
三　詔書幷宣示　明治十一年五月十五日　四一八
四　地方官への勅諭　明治十一年五月十五日　四二〇
五　葬儀に關する伊藤博文の書翰　明治十一年五月十五日　四二二
六　葬儀會葬者大禮服着用内達書　明治十一年五月十六日　四二三
七　儀仗兵に關する達　明治十一年五月十五日　四二四
八　吊砲に關する太政官の往復書翰　明治十一年五月十六日　四二四
九　故大久保内務卿葬儀要領拔萃　明治十一年五月十八日　四二七

一〇　葬儀之記　明治十一年五月十七日　四四二
一一　各國公使よりの吊詞　四五三
一二　「倫敦タイムス」社説の哀悼文　明治十一年五月十六日　四五八
一三　松平慶永より吉井・高崎への書翰　明治十一年五月十六日　四五九
一四　三條公より岩倉公への書翰　明治十一年五月十八日　四六〇
一五　岩倉公より伊藤博文への書翰　明治十一年五月二十日　四六一
一六　五代友厚より松方正義への書翰　明治十一年五月十六日　四六二
一七　伊藤博文より松方・鮫島への書翰　明治十一年六月十一日　四六五
一八　伊地知正治より吉井友實への書翰　明治十一年六月廿八日　四六九
一九　中井弘より松方・鮫島への書翰　明治十一年六月　四七〇
二〇　五代友厚より松方正義への書翰　明治十一年　四七二
二一　島田一郎等斬奸狀　明治十一年五月　四七三
二二　島田一郎口供書　明治十一年七月六日　四七九

卷下

二三　從一位追陞の達及宣文　明治三十四年五月廿二日　四八五
二四　勅撰神道碑建設の達書　大正二年五月七日　四八六
二五　勅撰神道碑　四八七
二六　正四位下左衞門尉楠正行朝臣碑　四九四
二七　咬菜軒題辭　明治十年十二月　四九六
二八　贈右大臣大久保公哀悼碑　明治十七年十月　四九六
二九　誕生地記念碑　明治二十二年　四九七
三〇　祭贈右大臣大久保公文　明治二十六年五月十四日　四九八
三一　濱寺公園惜松碑　明治三十一年十月　五〇二
三二　有待軒記　大正六年五月　五〇四
三三　贈右大臣大久保公先世記念碑　大正十二年一月廿八日　五〇七
三四　舊誓光寺址無參和尙座禪石記念碑　五〇九

三五　貫堂存稿　五一一
三六　甲東追憶詩歌　五一四
三七　佛人「モーリス・クーラン」著大久保傳一節　明治三十八年巴里出版　五一九
三八　米人「グリフイス」利通追頌文　昭和二年五月十四日　五二二
三九　參議兼内務卿贈右大臣大久保公家傳　五二三

大久保利通文書卷四十四

一六一三　伊藤博文への書翰　明治十一年正月十日　（伊藤公爵家藏）

【按】警視兵ノ恩給ニ關スル書類ヲ廻送シテ意見ヲ問ヒタルモノナリ

益御安固奉敬賀候陳ハ年内ゟ御配慮被下候警視兵恩給之一條猶別紙之通取調石井より差出候間則供高覽候別帋之通ニ候得ハ金額も相減候付可然歟与存候得共猶御異見有之候ハヽ可被示聞候何ゟ明日拜接御談可申上候得共其内艸々拜首

一月十日　利通

伊藤殿

【解說】利通ハ曩キニ西南役ニ從軍セシ警視兵ノ恩給制ニ就テ

伊藤參議ト議セシカ金額ノ點ニ付キ猶ホ調査ノ要ヲ認メ石井權中警視（邦猷）ニ取調ヲ命ス依リテ石井ハ案ヲ具シテ利通ニ提出セシカハ之レヲ伊藤ニ示シタルナリ

一六一四　得能良介への書翰 明治十一年正月十二日（大久保家藏）

【按】得能ノ依頼セシ製紙ニ試毫シ紙質比較ノ爲メ支那製紙ト共ニ返送シタルモノナリ

益御安固奉拜賀候陳ハ年内御遣被下候御製造之紙試毫候付供御高覽候尤上等支那製二枚相認差上候書之御鑑定ハ無覺束候得共紙之巧拙御分リ可有之候間御比較被成度候此旨艸々拜首

一月十二日　利通

得能賢臺

尚々先日ハ御尋被下辱未御無沙汰御免近々御引越ト承候間其上ト因循仕居候也

【解說】「御製造之紙」トハ當時得能ハ印刷局長ノ職ニアリシヲ以テ唐紙ヲ精製シテ利通ニ贈リ試毫ヲ求メ批評ヲ請フトコロアリ利通ハ所持ノ唐紙ト共ニ試毫シテ贈リ書ノ巧拙ハ解セサルヘキモ紙質ノ比較ハ爲スヲ得ヘシト戲ムレタルナリ

一六一五　駒場農學校開校式に奏上の祝詞 明治十一年正月廿四日（内閣公文錄）

茲ニ農學校建築竣ルヲ奏ス

龍駕忝ク親臨シ開校ノ典ヲ擧ケ玉フ本校ノ光榮何ヲ以テ之ニ加ヘン恭ク惟ルニ本邦ノ農事ニ於ケル未タ專ラ其學ヲ講スルヲ聞カス陛下聰明叡哲農學ノ急務ナルヲ知シメ玉ヒ此校ヲ創建シ博ク萬國ノ實驗ヲ徵シ精ク庶物ノ質性ヲ究メ大ニ富民殖產ノ道ヲ興隆セシメ玉フハ實ニ生民ノ大幸ニシテ國家ノ洪福ト謂フヘキナリ臣利通欽テ聖旨ヲ奉シ敢テ

此事ニ從フ豈ニ感激黽勉セサルヘケンヤ嗚呼我邦ノ農事ヲシテ駸々乎トシテ日ニ開ケ月ニ進ミ物産ハ益々繁殖ニ赴キ民生ハ益々富饒ニ至ラシメンコトハ今日ヨリ始マラン明治十年一月二十四日内務卿大久保利通謹テ祝詞ヲ奏ス

【解説】利通ハ夙ニ農業教育ニ意ヲ注キ九年五月農事修學場ヲ新宿勧業寮出張所内ニ設ケ各府縣ヨリ生徒ヲ撰拔學修セシムルト共ニ駒場農場ニ於テ實修ヲ爲サシメシカ幾何モナクシテ修學場ヲモ駒場ニ移スコトヽナリ十年十月新校舍落成セリ是ニ於テ十一年一月農學校ト改稱シ廿四日ヲ以テ開校式ヲ擧行ス是日聖上臨幸アラセラレ大臣參議以下參列スルアリ利通ハ學校規則新校舍繪圖面及ヒ學校ノ論ヲ奉リシニ聖上親シク勅語ヲ下シ賜ヘリ

【參考】其一　駒場農學校開校式勅語明治十一年正月廿四日

朕惟ルニ農ハ國ノ本ナリ物産由テ以テ殖シ生民由テ以テ富ム是レ此學ノ講セスンハアルヘカラサル所以ナリ今ヤ本校建築竣ルヲ告ク朕甚タ之ヲ嘉ス親ラ臨ンテ開校ノ典ヲ擧ク後來我國産ヲシテ益繁盛ナラシメ我國ヲシテ益富饒ナラシメンコトヲ望ム

【參考】其二　速水堅曹談話「利通ト船津傳次平」

駒場農學校ノ前身ハ明治七年四月内藤新宿勧業寮農事試驗場内ニ附設サレシ農事修學場ニシテ農學教員及ヒ農業指導者ヲ養成スルヲ目的トシ農學農藝化學獸醫等ノ學理ヲ教ヘ又農具ノ使用馬耕及肥料等實地演習ノ科目ヲ設ケ各府縣ヨリ生徒ヲ募集セリサレト經營上漸次不便ヲ感シ遂ニ駒場野ニ移轉スルニ至リ其ノ建築ニ着手セシカ明治十年末漸ク落成セリ是ヨリ先キ明治八年三月利通ハ各府縣ニ令シテ篤實ナル老農ヲ推薦セシメシニ楫取群馬縣令ハ船津傳次平ヲ推擧シタリ利通ハ既ニ余（當時富岡製絲場長タリキ）ヲ通シテ船津ノ名ヲ知レルカ是ニ於テ

船津ノ人物ヲ一見セント欲シ明治十年十月二十三日製絲場視察ノ爲メ富岡ニ至リシ際特ニ駕ヲ枉ケテ船津ヲ引見シ其ノ用フヘキヲ認メ遂ニ十二月二十四日內務省御用掛勸農局事務取扱ヲ命シ農事ノ調査ヲ擔任セシメタリ船津ハ利通ノ知遇ニ感シ駒場修學場ニ勤務講義ノ外實修地ノ開墾ニ從事シ先ツ原野ニ假小屋ヲ設ケテ之ニ住シ自ラ鉢卷ヲ爲シ股引ヲ穿キ鍬ヲ取リテ人夫ヲ督勵シタリ一日利通ハ親シク實況ヲ視察セントシ駒場ニ到リシカ船津ノ在ラサルヲ怪シミ之ヲ人夫ニ質セシカ其ノ彼等ト相伍シテ勞働スルヲ視テ問フテ曰ク君ノ奮勵誠ニ感スヘシ然モ自ラ人夫ト其ノ勞ヲ共ニセハ前日依賴セシ調査ハ爲スヘキノ時アラサルヘシト船津答ヘテ曰ク農事ノ調査ハ悉ク夜業トセリ故ニ聊カモ支障ナキヲ得ント利通又曰ク曠野假屋中ノ夜業ハ寂莫ノ感アラント船津曰ク駒場野ハ都人士カ想像セサル天然ノ詩境ナルヲ以テ絕ヘス天籟ノ妙音ヲ聽クコトヲ得ト書スルニ左ノ俳句ヲ以テセリ

駒場野や開き殘りにくつわ蟲

利通ハ大ニ喜ヒ厚ク其勞ヲ謝シテ歸レリ爾來船津ハ益感激シテ拮据經營セシカハ雜木荒涼ノ駒場野モ終ニ變シテ沃饒ナル熟圃ト爲レリ

一六一六　伊藤博文への書翰 明治十一年正月廿六日（伊藤公爵家藏）

【按】遊獵ニ勸誘シタルモノナリ

益御安固奉拜賀候陳ハ今日明日深川御出浮共候ハヽ御供相願度御都合宜ク候ハヽ今夕刻宿鳩明朝鴨迄御憤發ハかゝ若御同意ニ候得ハ早速中井ヘ申遣候樣可仕候乍去連々ゝ攻擊ニ而早過き候得ハ猶他日ニ可相願候此旨申上試候也

一月廿六日　　利通

伊藤賢臺

【解説】當時深川邊ハ人烟未々稀薄ニシテ好箇ノ遊獵地タリ「連々之攻撃」云々ハ伊藤ヲ頻々誘引セル後ナレハ其ノ都合ニ任スヘキノ意ナリ

一六一七　岩倉公への書翰 明治十一年正月廿九日　（岩倉家文書）

【按】各省豫算緊縮ノコト及ヒ建野郷三進退ニ關スル意見ヲ述ヘタルモノナリ

拜讀仕候陳ㄟ今朝ㄟ條公ハ御立寄有之候付御遲參之趣承知仕候

會計目的

諸省減額之事

大藏卿談話諸省減額五分通りよゐ凡豫算も出來候趣承候五分通相減候得ㄟ隨分各省大憤發無之候ゐㄟ中々尋常よゐㄟ六ゐ舗与愚考仕候間厚御評議速ニ御決定無之ゐㄟ相濟申ましく候

建野郷三云々ノ

何与り御決定無之ゐㄟ卽今之儘よてい甚不都合与奉存候下官憂慮候ハ若他よりと入說よゐ大臣之

奏上

御異論被爲在候樣有之ゐハ第一人撰之事ニゐ御大事与愚考仕候乍去眞ニ思食ニ出候得ㄟ彼是可奉申上義ニ無之是又厚御勘考條公ハ御示談被下度候

右拜答迄艸々參朝懸疎毫御容恕奉仰候也

一月廿九日　　利通

岩公

【解説】政府ハ西南戰爭ニテ莫大ナル經費ヲ要セシ爲メ旁財政整理ヲ斷行スルコトヲ決シ各省ノ豫算ニ付キ大藏卿ハ定額ノ五分ヲ削減スルノ方針ヲ樹テ利通ノ了解ヲ求ム依リテ利通ハ

之レヲ岩倉公ニ報シ速ニ評議ニ附シ確定セラレンコトヲ促シタルナリ建野郷三ハ舊小倉藩士ニテ十年十一月宮内省三等侍補ニ任セラル「云々」ハ同人進退ニ關スルコトナランカ

一六一八　岩倉公への書翰 明治十一年正月廿九日　（岩倉家文書）

【按】豫算會議ヲ開クニ當リ豫メ陸海軍當局ト協定ノ必要アル旨ヲ言上シタルモノナリ

拝讀仕候明日條公御不參ニ付御示諭之趣一々拝承仕候明後日之御評議之件猶篤与勘考仕候處漠然一同之御評議有之候ゟも纏り付兼候半与懸念今日退出後ゟ伊藤ゟ差越愚考之次第示談仕候處明日於御所大藏卿ゟ兩人ニゟ今一應内議ニ及山縣ゟハ伊藤ゟ一先巨細之次第ヲ談シ河村ヘハ下官ゟ示談致候ゟ其上公然御評議有之方可然諸省之内よゟも陸海軍第一ニゟ此兩省程克折合候得ハ他ハ決ゟ格別も有之ましく与伊藤与申合候事ニ御坐候仍ゟ山縣河村ヘ談候都合も有之候付時宜ニ依リ表通御評議ハ卅一日比ニ相成候歟も難圖是ゟ明日宮中ニゟ三人談合之都合ニゟ猶々申上候付左様御承知可被下候別段御賞詞之一條御見込も被爲在候由御直ニ可奉伺候

右拝復旁々艸々如此御坐候拝具

一月廿九日　利通

右　府　公

【解説】大藏卿ノ主張ニ係ル各省豫算ノ減額案ヲ決定スヘキ閣議開會ニ當リ利通ハ伊藤ト議シ陸海軍費ハ國防ニ關スル重大ナル關係上豫メ陸軍卿山縣有朋・海軍大輔川村純義ト協議ヲ遂ケントシタルナリ

一六一九　岩倉公への書翰 明治十一年二月二日　（岩倉家文書）

【按】建野郷三ノ件ニ付キ答書シタルモノナリ

拝讀仕候建野一條猶又奏上之御都合御示被下承知仕候此上ハ致方無之与奉存候乍去尚御直ニ明日も可申上候此旨御請まて艸々如此候也

二月二日　利通

岩倉公

一六二〇　松田道之への書翰 明治十一年二月三日（松田家蔵）

【按】大審院判決ノ内定ト廢官ニ關スル布達ノ取消ヲ通シタルモノナリ

別紙致返上候昨日司法卿ゟ院長ゟ示談大坂上等裁判所之裁決ヲ破毀被告ノ申分ヲ正理与内定致候付安心候様承候間爲御心得申上置候昨日廢官云々之事地方官ゟ御達之義ハ間違ニゟ取消之筋相成候

今日ゟ不參候付少輔へ御傳置可被下候

右申上度艸々如此候也

二月三日　利通

松田殿

猶民費取調之事ハ如何ニ候や相調候ハヽ一應一覽致度候也

一六二一　重野安繹への書翰 明治十一年二月六日（大久保家蔵）

【按】末松謙澄ヲシテ史學ヲ研究セシムヘキニヨリ上申書ノ提出方ヲ申入レタルモノナリ

過刻御談申上候末松謙澄修史學研究之事伊藤參議ゟ相談候處同人ゟ適任与存候付至極同意ニ候就ゟハ公然政府ゟ御達相成外務卿ゟ別帋之通被仰付候旨ヲ以御達有之可然与之事ニ候仍ゟ末松謙澄ゟの様被仰付度旨ヲ以其局よりと上申相成候様致度与之事ニ候間明日迄ニ上申書御調御差出可有之候尤取調ニ付ゟハ參照書類も入用可有之ニ付御調之上買入費用別

途御渡相成度趣ヲ以御申立有之候ク候此旨艸々申進候也

二月六日　利通

重野様

【解説】末松ハ太政官權少書記官タリシカ一月廿九日願ニ依リ官ヲ免セラル蓋シ當時修史局ニ於テ歴史ヲ編纂スルノ議アリ先ツ英佛ニ於ケル編纂方法ヲ調査スルノ要アリテ之レカ人員ヲ物色セシカ利通ハ末松ヲ適任トシ任用手續上一等編修官重野ヲシテ修史局ヨリ申請セシメントシタルナリ遂ニ末松ハ九日太政官ヨリ「本務之餘暇ヲ以英佛歴史編纂方法取調申付候事」ノ沙汰ヲ蒙ルニ至レリ

一六二二　三條・岩倉兩公への書翰 明治十一年二月七日（櫟原新輔氏藏）

【按】千住製絨所工場敷地見分トシテ出張ニ付キ不參ノ旨ヲ屆出テタルモノナリ

猶岩倉殿御掛之時限ニハ必參殿仕候也

益御安康被爲渉奉敬賀候陳ハ千住羅紗器械處就建築本日見分として差越候付不參仕候大藏卿工部卿ニハ關係不少候付同行仕候間此段下官ゟ御屆仕候間左様御承知被下度奉願候也

二月七日　利通

三條殿

岩倉殿

【解説】九年二月利通ハ千住ニ製絨所ヲ創設セントシ政府ノ容ルヽ所トナリシモ偶々西南役ノ勃發ニ因リ一時之レヲ中止セリ亂ノ平定スルヤ再ヒ建設ニ着手シ是日大隈・伊藤兩參議ヲ伴ヒ實地見分トシテ出張シ規模計畫ヲ定メタルナリ初メ創設ノ議決スルヤ富岡製絲場長速水堅曹設計工事ヲ擔任シ製絨ノ原

料ヲ下總ノ牧場ニ仰キ以テ毛織物ノ輸入ヲ防遏センコトヲ計リシモノニテ生存中ニ完成セサリシト雖モ翌十二年九月ヲ以テ開業ノ盛典ヲ擧行シ十四年内務省ヨリ農商務省ノ所管ニ移リ二十一年更ニ陸軍省ノ管理ニ歸ス大正十五年軍備縮少ノ結果著シク作業力ヲ減シタルモ昭和三年度ノ生産額ハ軍服・帽・脚絆・毛布・外套各種ノ製絨ヘル・セル及フエルト等六拾萬メートル金額貳百八拾萬圓餘ニ達シ男女六百參拾貳名ヲ使用セリ要スルニ本製絨所ハ内地產ノ羊毛需用ヲ促進シ民間製絨業ノ模範ヲ示シタルモノニテ毎年九月開業記念日ニハ利通ノ肖像ヲ飾リ賀宴ヲ設ケ昭和三年ハ創立五十年ニ相當スルヲ以テ盛大ナル記念祝典ヲ擧ケタリキ

（陸軍省編纂・千住製絨所五十年略史）

【參考】其一　千住製絨所の創立

明治の初我國の工業未た開けす毛織物の如きも年々多額の供給を外國に仰けり内務卿大久保利通此の趨勢を察し毛織物の自給自足は國家の大計なるを惟ひ官卒先して之か範を示さんとし明治八年緬羊飼育奬勵の爲に下總に牧羊場を設置し翌九年二月製絨所創立のことを太政官に具申せり其概要左の如し

時勢の變革に隨ひ人民需用の物品今古株を守る能はす卽ち服用の如きも稍其の趣を異にし之かため毛布類の輸入年を逐ひて夥多なるは輸出入表に瞭然たり外人已に其時勢を察し昨八年七月中米國人某頻に毛織物製造所建設の儀を請願せり然るに右事業の儀は其前精細意見を具し上申し置きたるに由り該業の儀は本邦に於て既に開說の見込有之旨を以て斷然拒絕し置きたれ共荏苒經過すれは前言も虛誕に陷り再度紛議を釀し可申も難計加之現今海陸二軍及ひ警視廳所用の毛布代價官費に係るものゝみと雖も一ヶ年凡五拾五萬七千圓餘にして其他官民一般の費に係るもの枚擧すへからす

畢竟本邦未た其製法開けさるにより從ひて巨萬の金額を海外に投し國土の元氣を耗費するは頗る不堪遺憾儀に付本邦所產を以て國用を可足目途にて既に牧羊開業漸次蕃殖の方法施爲の運歩相立候に付於是羅紗製造所を建設致度夫れ牧羊と製絨とは相待ちて互に功用を全うすへき者にて不可離は不待辯儀に有之牧羊既に開けは製絨隨て興す可し然れ共元來是等の事業を經營するは人民の職にして敢て官行を主旨と致候儀には無之候へ共我今日の人民何そ能く巨萬の費額を要し精且つ大なるの事業を擧行するを得ん是れ斯の事業時勢の已むを得さる官先つ之を創立し以て衆の耳目を開き提撕誘導他日有志の營業に付するも亦其の捷路に便を取る今日の急務と存候假令目今獸毛を購求して一時之を開設するも業場愈相開くる時は牧畜も亦隨て盛に相成るは固より言を待たす數種の毛布國用自ら辨するに至らは輸入の夥多を豫防する亦期す可きなり

依て勸業寮傭井上省三嘗て目耳曼地方に於て親しく其業に從事し機械の便迂職工の得失經驗實施する所に依り創設に係る經費を取調へたるに明治九年度に於て拾六萬七千參百貳拾貳圓同十年度に於て五萬貳百貳圓五拾錢合計金貳拾壹萬七千五百貳拾四圓五拾錢を以て完然成功を得可し云々

明治九年三月十四日に至り製絨所創立の允許あり同年五月製絨機械の購求及工師雇入工場設計研究の爲井上省三を獨逸國に派遣せしめらる

【參考】其二　男爵大倉喜八郎談話「大久保公と毛織事業」

明治六年の事でありますが大久保・木戸の兩公は歐洲視察の途次巴里の「グランドホテル」に滯在して居られました當時老生も巡遊して巴里より出て「グランドホテル」で兩公に面會致しましたが大久保公は老生に向ひ歐洲視察の目的をお尋に成ましたので老生は大要左の通りのお

答を致しました『私は明治の始め今陸軍が武庫司と申ました時代より同所の御用を勤め居る升故兵隊の制服に注意を怠りません現在我日本の兵服は御承知の如く肌に木綿の莫大小を着其上に紋羽の繻絆を重ね夫れから表が紺地の小倉裏が紋羽の「チョッキ」と上着とに同樣のズボンを穿いて居ります爲め行軍中に雨に逢へば濕布肌に泌み通つて不快の感到底堪へられませぬ苟も國家の干城たる軍隊の服も今後羅紗服に代へなければならぬ事と存します夫故私は羅紗は日本で織れるものでなるり否や假令完全な羅紗は急に織り出せぬとしても せめては毛布位は織れそうなもので夫れより段々羅紗を織ッて兵隊服改良の途を開きたい斯う思ひまして此點を取調べたいのが今回私の視察の一要點で御座ります』と大久保公は此話を聞あれ大に賛成の意を表せられて斯う云ふ意見を述べられました『成程我日本の兵服は何時迄も紋羽で押し通す事も出來まい早晩羅紗服に改良しかければならぬさすれば貴公の云ふ通り遙々其羅紗を外國より購入もるより日本で織るが必要でなる夫れに就いては斯う云ふ樣にしてはどうか貴公は始めて海外を視察に來た日本商人の先覺者である其先覺者が折角よい考へを出して日本で羅紗を織る羅紗が織れなければ毛布でも織ッて見ようとの事で其考案は至極宜しいが兎に角始めての事業でなるから如何云ふ事で失敗せぬとも限らぬ一旦貴公の樣な先覺者が失敗もれば次いで起るものがなくなる夫れ故に大倉には失敗させたくない夫れより先ッ試みに毛織事業を政府の力で着手して相當の成績を收め事業に見込がなる樣になれば貴公の手に拂下げる事にしては如何り其方も安全ではないか』との御話でなりました其所て老生は『如何にも御尤の仰せで御座いますさう云ふ風にして戴けば實に安心でありまも』と答へたので大久保公は木戸公と御相談になつて早速着手される事に決定し『斯う話の極つた上は大勢の留學

生より人を選んで研究させる事ゝするから明後日又來て貰いたい』と云ふ事でありました翌々日ゝなつて約束の如く大久保公を訪問致しますと公は『段々話を聽いて見るゝ毛織事業は中々六ヶ敷ものと申事である之を起すゝは第一ゝ織物第二ゝ羊ゝ就いて研究しなければならぬ其所で織物の研究ゝは木戸公の選拔で長州の學生井上省三又羊の研究ゝは吾輩の選拔で薩州の岩山敬義と云ふ人物を選み井上は獨逸の「ケムニチ」の織物を調査研究し岩山は米國の牧場ゝ就いて緬羊飼育の方法を研究する事にあつた』と云ふ御話が御座いました之れが明治六年の事でありました夫ゝら明治十年ゝなつて岩山は其研究を遂げ米國より羊を買つて持ち歸り下總で牧養し後更に濠洲ゝ赴き濠洲ゝらも羊を購ひ歸つて飼育しましたが我氣候は緬羊ゝ適せぬ爲めゝ種々の病氣で失敗を重ね明治十五年ゝは農商務省の農務局長となり後知事ゝ榮轉したのでありますも一方獨逸で毛織物の研究を遂げた井上省三は明治十一年ゝ歸朝しましたゝら老生も井上の相談ゝ預り内務省勧業寮の下で製絨所を新設する事となりその敷地檢分の爲め鴻の臺邊を取調べましたが遂ゝ今の千住製絨所の所在が官有地であつた關係上茲ゝ新設する事となり井上は長く千住製絨所長として働いて居りました

之れが抑も日本ゝ羅紗の織れる樣ゝなつた濫觴で現在我邦毛織業の繁昌は畢竟大久保公が老生の建言を容れられ木戸公と協議の上決然斷行せられた賜ものである木戸大久保兩公は實ゝ我邦毛織業の大恩人であつて我國民に光被する其恩澤は千秋不朽であろうと考へられます

之れは餘談でありますが大久保公の萬事ゝ親切であつた事は前述の毛織業を政府で起すと極つた事です老生に向つて『毛織業を起すには機械を買はなければならぬが貴公は金を持つて居るか』との御尋

ね『左様金を持ッて來て居ります』『其金は何處ゑあるか』『オリエンタルバンクゑ五萬圓預けてあります』『さうゐ機械を買はゐいとすればさう云ふ大金は不用であるから大藏省の吉田清成ゑ預けるが好ゐろう』と注意されましたゐら老生は吉田氏ゑ預けました此の頃佛國在留の日本人で南貞助と云ふ人が米國銀行の手先となつて高い利息で金を預る事を世話して居た爲め我留學生で大分金を預けた人があるすると米國の銀行が潰れて仕舞ッて利息どころゝ元金も少しも取れない當時山田陸軍少將や鹽田氏や久米邦武などを始め隨分大人數が損害を蒙ゐました老生も右の預金を大ゑ勸誘されましたが大久保公の御注意もあり又老生は利息を取る爲ゑ金を持參したのではないと云ッて斷然拒絶しました爲めゑ損害を蒙らず歸朝後吉田氏よりの爲替金は無事安全ゑ受取る事が出來たのでありました

一六二三　得能良介への書翰 明治十一年二月八日　（大久保家藏）

【按】紙幣面御寫影ノコト不採用ノ旨ヲ通シタルモノナリ

尚々此間御賴ゑ書相認有之候故序ニ差上候餘リ出來不宜候延引御免

今朝御談ゑ

御寫影ゑ一條於內閣發言候處大藏卿咄ニ第一貨幣ニも

御寫影無之其上魯國ナトニおひても眞貨幣といへとも帝王ゑ寫眞無之且

日本ニおひてハ未種々ゑ論有之事故先不可然与ゑ事ニ伊藤とも示談致置

候岩倉殿も未ゑ日本てハ六ヶ舗与ゑ御論ニて候迚も埒明キ候咄ニ無之强

ゐ氣張ラストモ相濟候事故其マヽ差置候由ゐ御斷念ゑ上他ニ御調替へ被

成候方可然候此旨艸々猶面上委曲ゑ御咄可申上候也

二月八日　利通

得能老臺下

【解說】當時紙幣改造ニ際セルヲ以テ印刷局長タリシ得能ハ新

造紙幣ニ聖上ノ御眞影ヲ掲載シ奉ラントコトヲ利通ニ協ル依リテ利通ハ是日閣僚ニ談セシニ岩倉右大臣・大隈大藏卿同意セサリシカハ他ニ考慮スヘキ旨ヲ告ケタルナリ

一六二四　重野安繹への書翰 明治十一年二月九日　（大久保家藏）

【按】末松謙澄任命上申書ノ提出ヲ重ネテ促シタルモノナリ

愈々御安固奉賀候陳先日申上候末松一條昨日まて〻上申書上リ居不申候既ニ無餘日候間今日ゟ御持參有之候樣ゟ〻度若昨日御差出有之候ゟも一寸皇居へ御出頭有之度此旨艸々申遣候也

二月九日　利通

重野殿

一六二五　岩倉公への書翰 明治十一年二月十日　（岩倉家文書）

【按】公ヨリノ贈品ヲ謝スルト共ニ皇太后宮新宿勸業試驗場行啓ノ期日ヲ報シ煙草獻上ノコトニ及ヒタルモノナリ

敬讀仕候陳ゟ珍舗御品毎々御送與被下難有拜受仕候

○別紙電報ハ如命明日皇居ゟ持參可仕候

○皇太后新宿ゟ行啓之義ゟ十四日与御内決之由宮内卿ゟ通知有之候付左樣御承知可被下候

○煙艸后宮ゟ獻上之事拜承仕候未在合品も有之候付　御覽ニ供し度箱拵等ニ取懸候付出來次第獻上可仕候是亦御安心可被下先拜答迄如此餘拜謁可奉謝候拜白

二月十日　利通

岩倉殿

一六二六　佐々木長淳への書翰 明治十一年二月十日　（佐々木忠次郎氏藏）

【按】皇太后宮新宿勸業試驗場行啓ノ日限ヲ通知シタルモノナリ

皇太后宮勸農局試驗場へ

行啓之儀來十四日ニ御内定之旨宮内卿ヨリ達有之候付諸事手當向最早相調候事ト存候得共午前九時十時之間ト存候ニ付御含可有之候

若又可承事も有之候ハヽ明朝　皇居へ參入ニ付十時頃御出頭有之候ゐも宜此段爲念申進候也

二月十日　利通

佐々木殿

【解說】利通ハ曩キニ新宿ニ勸業寮出張所（勸業試驗場）ヲ創設スルヤ佐々木ヲ所長ニ任シ專ラ養蠶製絲業ノ研究改良ニ膺ラシム佐々木ハ越前福井ノ人當時斯道ノ學者ナルカ猶ホ次ノ談話ニテ當時ノ事情ヲ知ルヘシ

【參考】佐々木長淳談話「故大久保公の蠶絲業奬勵」明治四十三年三月

故大久保内務卿カ熱心ニ養蠶製絲ニ盡力ノコト宮中ニ達シ十一年二月十四日皇太后陛下ニハ新宿試驗場ニ行啓アラセラル當日ハ試驗ノ狀況成績ヲ陛下ノ御覽ニ供シ詳細御說明申上ケシニ深ク御感遊ハサレ辱クモ御奬勵ノ懿旨ヲ賜ハリシコトハ微臣ノ光榮トシテ忘ルヽ能ハサルモノ又其ノ當時卿ヨリ贈ラレシ手翰アリ長淳ノ家寶トシテ毎歲卿ノ忌日ニ之ヲ掲ケ遺風ヲ拜シ居レリ顧ルニ明治七年ノコトナリキ某日卿カ訓示ニ曰ク「今後數年ヲ出テスシテ全國ノ蠶絲業者ヲ東京ニ召集シ養蠶製絲桑樹ノ栽培其他蠶兒及ヒ蠶種ノ病毒檢査ノ方法等ニ關シ一大會議ヲ開キ必要ノ事項ヲ諮問研究シ大ニ改良奬勵ノ策ヲ講スヘシ其期ニ臨マハ足下ハ其衝ニ當ルヘケレハ今ヨリ充分ノ取調ヲ遂ケ準備スル所アルヘシ」ト是ニ於テ長淳ハ内命ノ重大ナルヲ考ヘ内務省附屬内藤新宿試驗場中ノ養蠶掛事務所ニ休日ヲ廢シテ出勤シ

晝夜其調査ニ從事シタリ先ツ養蠶中病蠶ト認メタルモノハ一々其病徵ヲ檢査解剖シ病原ノ探究ニ務メタリ同年六月十四日偶々病蠶ヲ解剖スルニ當リ第五齡ノ蠶兒ノ體內ニ蠁蛆ノ寄生セルヲ發見シ直チニ說明書ヲ添ヘ內務卿ニ呈セシ時ノ如キ卿ハ非常ニ喜ハレタリキ又長淳ニ諭サレシ言ニ曰ク蠶絲業ヲ廣ク民間ニ發達セシムルニハ大ニ指導保護奬勵ノ途ヲ開カサルヘカラス然ルニ若シ當業者ニ對スルニ妄リニ干涉ヲ以テセハ却テ當業者ヲ壓迫シ發達ヲ妨ケ往々奸商ヲ跋扈セシメ國帑ヲ浪費スルノ虞アリ依テ保護奬勵ト干涉トハ能ク區別シテ處理セサルヘカラス過般已ニ蠶種製造ヲ制限スルト放任スルトノ兩說出テ遂ニ制限法ヲ採用スルコト、ナリシヲ以テ政府ハ莫大ノ蠶種ヲ買上ケ横濱港ニ於テ巨萬ノ原蠶紙ヲ燒却スルノ已ムヲ得サルニ至リシコトアリト是レ蓋シ暗ニ干涉ノ弊ヲ指摘セラレタルモノノ如シ又當時卿ノ內命ニ曰ク養蠶製絲栽桑ノ試驗ニ就キ十縣下ヨリ斯業ニ熟達老練ノ當業者ヲ召集シ隨意ニ意見ヲ開陳セシメ大ニ改良ヲ圖ラサル可ラス特ニ我邦特有ノ手繰若クハ長髮座繰ノ製絲ヲ十分調査スヘク同時ニ歐洲清國等ノ製絲器械ヲモ比較試驗シ實地ト學理ノ兩面ヨリ研究改良ヲ施スヘシ云々ト長淳ハコノ內命ニ基ツキ明治七年以來試驗ヲ重ネタリシモ內務卿薨去後ハ不幸事業中止ノ悲運ニ接シ長淳ハ青山御所內養蠶御用掛ニ轉スルニ至レリ又明治七年內務卿ハ清國ヨリ魯桑ヲ取寄セラレ長淳ニ命シ試驗場內ニ試植セシメラレシニヨリ「蠶桑輯要」中ニ載セタル一幹八枝ノ式ニ則リ其培養ニ着手シタリ又同時ニ清國ヨリ拓樹ノ苗木ヲモ取寄スル筈ナリシニ誤ツテ楮ノ苗木來着セシカハ遂ニ拓樹ノ栽培ヲ試ムル能ハス明治十三年卿ノ遺志ヲ繼キ自費ヲ投シテ拓樹ノ苗木ヲ取寄セ之ヲ蕃殖シ各地ノ有志者ニ頒チシコトアリキ

一六二七　伊藤博文への書翰　明治十一年二月十一日　（伊藤公爵家蔵）

【按】米國郵便船出帆ノ期日及ヒ船名ヲ問合セタルモノナリ

昨日ハ御妨申上候其節御咄承候米利堅郵便船愈來十四日出帆相成候ヤ乍御面倒御聞合被下候樣奉願候尤船名相分候得ハ是又爲御知被下度此段艸々拜首

二月十一日　利通

博文盟臺下

一六二八　賞典祿獻納願　明治十一年二月十六日　（内閣公文錄）

【按】賞典祿ヲ献納シテ生徒奬學ノ資ニ充テンコトヲ願ヒタルモノナリ

利通賞典祿二ヶ年分勸農局ヘ納付之分仕用方法之儀伺

利通賞典祿明治八九二ヶ年分金五千四百貳拾參圓九拾六錢八厘也曩ニ當省勸農局經費之内ヘ納付候ニ就テハ其金額ハ同局農學校經費ニ充テ其仕用方法ハ工部大學校献金貯蓄ノ方法ニ倣ヒ該金額ヲ農學校備蓄金トシテ堅固ナル銀行ヘ定期預ヲ以之ヲ預置シ其元金ヨリ收得スル處ノ利子ヲ以毎歳同校生徒大試驗之節優等者ヘ給與スル褒賞費ニ充テ之ヲ永遠ニ保存生徒教育ヲ裨補候樣致度依テ勸定帳之儀ハ該校備金ノ名義ヲ以決算相立候間此段併テ相伺候至急裁可ヲ仰キ候也

明治十一年二月十六日　内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

（朱書）伺之趣聞屆候事　明治十一年三月十八日

【解説】明治八年十二月利通ハ王政復古ノ功ニ依リテ拜賜セシ賞典祿ヲ年々殖產興業資金中ヘ獻納方ヲ願出テ嘉納セラレタリ九年家祿賞典祿ノ廢セラレテ金祿公債證書ノ發行セラルヽヤ更ニ賞典祿二ヶ年分乃チ金五千四百餘圓ヲ駒場農學校奬學

資金ヘ寄附セントシタルモノニテ爾來學校ニ於テハ其利子ヲ以テ年々學術優等ナル生徒ヲ褒賞セリ明治十五年六月農學校創立以來卒業セシ者ノ中優等者五十八人ニ學士ノ稱號ヲ授與セシカ當時ノ農務局長田中芳男ハ其式ニ臨ミ式辭ヲ述ヘテ次ノ如ク云ヘリ

夫レ本邦農ヲ以テ國ヲ立ツ稱シテ瑞穗ノ國ト謂フト雖モ其法或ハ慣習ニ成リ或ハ漢土ニ摹倣シ固ト一定ノ規律ナシ是ヲ以テ未タ曾テ學士ト稱スル者アラサルナリ故内務卿贈正二位右大臣大久保公夙ニ之ヲ慨嘆シ歐米諸洲ノ法ヲ參酌シ學士ヲ養成シ以テ富國ヲ圖ラントシ自ラ其議ヲ起シテ本校ヲ創立シ以テ率先學資ヲ獻納ス實ニ明治十一年一月ナリ於戲公既ニ沒セリ而テ此盛典ヲ擧クル所以ノモノハ蓋シ本校維持ノ宜シキヲ得ルニ職由スト雖モ亦松方内務卿ノ能ク之ヲ繼續スルニ非レハ安ンソ公ノ偉績ヲ見ルコトヲ得ンヤ

後明治二十七年ニ至リ學業優秀ニシテ學資ニ乏シキ者ニ之ヲ貸與スルコトニ改メ農學ノ進展斯業ノ發達ニ貢獻スルトコロ少ナカラス昭和三年五月東京帝國大學農學部ノ調査ニ依レハ右金額ハ贈右大臣大久保利通奬學金ト名稱ヲ變更シ農學部學生中學資又ハ修學旅費ヲ支辨シ得サル者ニ貸與スルコトニシ（旅費ノ貸與ハ其後止ム）右學資貸與ヲ受ケ既ニ卒業セシモノ又ハ現ニ在學中ノモノ合計九十一人ニ達セリ

（内閣公文錄）

【參考】大隈大藏卿の回答書

内務省伺大久保利通賞典祿二ヶ年分勸農局へ納付金仕用方法ノ儀ニ付上答

内務省伺大久保利通賞典祿明治八九兩年分勸農局經費ノ内へ納付金仕用方ノ儀ニ付御照會ノ趣敬承仕候右ハ曩ニ調査局へ回答ノ次第モ有

之候へ共今般農學校備蓄金トシテ永遠保存ノ方法設立ニ付テハ同省伺ノ通御聞屆相成可然存候依之別紙返進此段上答候也

明治十一年三月五日　大藏卿大隈重信

太政大臣三條實美殿

一六二九　岩倉公への書翰 明治十一年二月十八日　（岩倉家文書）

【按】華士族以下授産方法ノ議案ヲ内覽ニ供シタルモノナリ

兼而申上置候華士族已下授産方法取調此節凡出來候付近々上申大ニ御評議相願度含ニ有之候付其内別冊先以奉供御内覽候此旨艸々如此候謹白

二月十八日　利通

岩倉殿

別冊相付

尚々御覽濟三條公ゟ御廻被下候樣奉願候也

一六三〇　岩倉公への書翰 明治十一年二月廿一日　（櫟原新輔氏藏）

【按】書物廻送及ヒ明後日閣議ノコトヲ述ヘタルモノナリ

一益御安祥奉敬賀候陳ぇ昨日申上置候書物今日中出來伊藤方ゟ兩大臣公へ一通ッヽ御廻申上候事ニ約束仕候其内御示談ゑ御都合も可有之候付一同御評議ハ明後廿三日土曜日例刻參　朝ニて會議相成可然と存候間其旨條公へも申上置候間左樣御承知可被下候此旨艸々如此御坐候拜具

二月廿一日　利通

岩倉殿

一六三一　岩倉公への書翰 明治十一年二月廿二日　（岩倉家文書）

【按】地方官召集ノコト及ヒ建野鄕三ノ進退問題ノ決定ヲ通知セラレシニ對シ答ヘタルモノナリ

拜讀仕候陳地方官被召候事件今日御伺相成廿六日与御取究被爲在候由承知仕候宮内卿ゟも御書中ニ而御通知有之候少々延引仕候得共不得止御都合ニ付無致方義与奉存候建野一條も明後日御運ノ由承知仕候明朝條公ゟ御出被爲在候付御立寄可被下趣是又拜承仕候御請迄艸々如此御坐候拜白

二月廿二日　利通

右府公

【解説】八年第一回地方官會議ヲ開會セシカ九年ハ東北御巡幸ノ爲メ十年ハ西南役ノ爲メ中止セリ是年愈第二回ヲ開會スルニ決シ公ヨリ來ル廿六日ヲ以テ地方官東京召集ノコト御裁可アラセラレシ旨ヲ報シ來レルナリ

大久保利通文書巻四十五

一六三二　三條公への伺書（明治十一年三月六日）（農林省農務局編・福島縣安積國營開墾事業ニ關スル調査概要）

【按】殖産ヲ奬勵シ授産方法ヲ確立スルヲ國家焦眉ノ急務ナリトシテ建議シタルモノナリ

一般殖産及華士族授産ノ儀ニ付伺

國土固有ノ物産ヲ改良シ國人恒有ノ産業ニ安ンシ以テ國家ノ元氣ヲ養成スルモノ百務中最急ナルハ更ニ呶々ヲ要セス夫レ農ハ(耕耘・種藝・牧畜及紡績等ノ雜工ヲ總稱ス)本邦ノ根基ニシテ百事之ニ由テ成ル然ルニ近來虚薄ノ世弊利ヲ梢末ニ競爭シ其ノ根本ヲ勉メサルヨリ固有ノ農産漸ク廢ル今ニシテ之ヲ拯ハスンハ將來國家ノ元氣ヲ損シ其ノ衰耗ノ狀果シテ如何且夫レ華士族ヲ通觀セハ其ノ恒産ヲ有スルモノ實ニ千中ノ二三ニ及ハス多

クハ徒食放懶ニシテ居常鬱屈不平ヲ銜ム禍機ノ陰晦潛匿スル蓋シ之ヲ淵叢トセン今ニシテ之ヲ濟ハスンハ他日國家ノ元氣ヲ毒シ其ノ慘毒ノ徵果シテ如何此ヲ思ヒ彼ヲ慮ル甚タ憂慮ニ堪ヘサルナリ曩ニ祿制改定ノ時盛意ヲ體シ授產局ヲ省中ニ置キ徐次其ノ方法ヲ按スルノ際國事ノ非常ニ遭遇シ空ク今日ニ荏苒セリ今ヤ海內靜定ニ歸シ士族ハ故套ヲ稍ク脫シ新好位置ヲ占ンコトヲ欲シ民庶ハ浮華ヲ已ニ厭ヒ着實事業ニ服センコトヲ願フ禍福其ノ地ヲ轉換セシム今ヲ卽チ時機トセンカ請フ能ク此機ヲ愆ラス授產ノ方ヲ設ケ二族ヲ誘ヒ開產ノ法ヲ厚クシテ農事ヲ改良シ以テ元氣ヲ旺盛ナラシメ國力ヲ伸張セラレンコトヲ乃チ其ノ方法ノ大要ヲ草シ謹テ之ヲ上呈ス但シ其經費ノ概計六百萬圓（此ノ九分通リハ返納ニ依ルモノトス）ノ巨額ニ就テハ方今國費多端ノ際稟議スルニ忍ヒスト雖トモ他年利害ノ由ル所目下施行ノ如何ニ在ルヲ深思熟慮スルニ於テハ顧念スルニ遑アラス敢テ之ヲ上稟ス俯シテ願クハ非常ノ廟議ヲ盡サレ裁可ノ指令アランコトヲ依テ別紙相添此段相伺候也

明治十一年三月六日　內務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

追テ本文御裁下ノ上每事着手ノ節ハ詳細ノ儀取調可相伺候得共爰ニ第一等ヨリ三等迄入費豫算方法概略以下ヲ添ヘ供電閲候

一般殖產及華士族授產方法

第一等

第一等ノ方法ハ專ラ地方官ヲシテ適應ノ土地ヲト定セシメ官其ノ開墾ニ要スル土地ヲ與シ且家屋其ノ他農業ニ必要ナル物品ヲ備ヘ二族中遠近ヨリ移住ヲ望ム者ニ給貸シテ營業セシムルモノトシ此ノ戶數先一萬三千戶ヲ目的トシ費額ハ豫算書ニ載ス

第一條　移住一戶ニ充ルノ土地ハ田畠宅地合セテ三町步ヨリ多カラス一町步ヨリ少カラサルヘシ

但事業性質ト資力ノ數量ニ由リテハ別段ノ詮議ヲ以テ三町歩以上ニ及ホスコトモアルヘシ

第二條　開墾並道路疏水等土工ノ費用及第五條ニ掲ル旅費ハ之ヲ官費トナシ償還ヲ要セス

第三條　一旦官給ニ付他日償還ヲ要スヘキモノ左ノ如シ

居宅　物置便所

肥小屋　食料

種子

此外實際馬ヲ使用シ得ル者ハ農馬・農具・馬飼料ヲ貸給ス可シ

第四條　貸與ニ係ルモノハ總テ本人ノ請願ニ由ルハ勿論ニ付或ハ家屋ヲ狹クシ又ハ物品ヲ減スル等隨意タルヘシト雖トモ定規ヲ超過スルカ如キハ之ヲ許サス但自費ヲ以テスルモノハ此ノ限リニアラス

第五條　開墾地ヘ移轉スルモノハ一日十里詰一人ニ付金參拾錢ノ割合ヲ以テ里程及人員ニ應シ旅費ヲ給與スヘシ

但二年未滿ノ小兒及十里以内ヨリ移住スル者ハ旅費ヲ給セス

第六條　農馬ハ多數ノ田圃ヲ耕シ且實際馬ヲ使用シ得ルモノニアラサレハ之ヲ貸下セス飼料モ之ニ從フ

第七條　第三條ニ掲ル居宅其ノ他ノ費用貸與ニ係ルモノハ十箇年据置後三十箇年賦ヲ以テ償納セシムヘシ

第八條　開墾地鍬下年期ハ二十箇年ト定メ年季明ケ後三十箇年間ハ定租ノ半ハヲ減スヘシ

第九條　移住人中祿券ヲ有スル者アルトキハ之ヲ官ニ預リ抽籤ニ當ルトキハ尙其金ヲ預リ徒費スルヲ許サスシテ或ハ第七條ノ償還ニ充シムヘシ

第十條　此ノ移住人タル者ハ窮乏者ヲ主要トス故ニ其ノ所有祿券ノ利子

年額六拾圓以上ニ及フ者ハ前記ノ給與貸與ノ恩典ニ預カルヲ得ス

第十一條　祿券利子年額六拾圓以上ニ及フ者トモ開墾ヲ要スルカ爲ニ自費ヲ以テ移住ヲ望ム者アルトキハ篤志者ニ限リ之ヲ許スヘシ

第十二條　第十一條請願ノ趣ニ由テハ一時官設ヲ以テ開墾建築ヲ爲シ移住ノ日ヲ期シテ辨償ヲ爲スヲ得ヘシ

第十三條　第十一條十二條開墾建築以下總テ自費經營ニ係ルト雖トモ水利道路及鍬下年季同年季明キ後賦税等ハ他ノ移住人ト等ク恩典ニ服スルヲ得可シ

第二等

第二等ノ方法ハ二族中其ノ所在ノ地ヨリ一里内外通作スルヲ得ヘキ場所ニ於テ開墾ヲナシ農事ニ從事セント請フ者ヘ官有荒蕪地ヲ貸與シ營業セシムル者トス（官有荒蕪地ヲ貸與シ鍬下以下ヲ緩ニスルニ止リ別ニ費額ヲ給貸セス故ニ之ヲ第二等トス）

第一條　第二等ノ趣旨ニ據リ荒蕪原野ヲ開墾シ耕作セント請フ者ヘハ反別三町歩以内官有荒蕪地ヲ貸與スヘシ

第二條　開墾地ハ着手ノ月ヨリ滿二十五箇年ヲ以テ鍬下年季トナシ年季明キ後三十年間ハ定租ヲ半減スヘシ

第三條　貸下地ニ關スル事件ニシテ此ノ方法書ニ矛盾セサル者ハ官有荒蕪地貸渡規則ニ照準スヘシ

第三等

第三等ハ一般殖産ノ事ヲ謀ルカ爲ニ資本金參百五拾萬圓ヲ内務省ニ備ヘ各地方固有物産ノ保護改良ヲ主トシ推テ運輸ノ便ニ及ホシ漸次諸業ノ改進各物ノ蕃殖上要用ナル資本ニ給貸スルモノトス

但運輸ノ便ヲ開クカ如キ漸次各地ノ形狀ニ從テ擧行スヘキモノ百端アリト雖トモ中ニ就テ尤其ノ較著ナルモノ七トナス其一宮城縣下野蒜開港此ノ土工タル北上川ヨリ運河ヲ疏鑿シ港ヲ野蒜ニ開設スヘシ其費額凡參拾五萬圓トス其ノ二新潟港改修工費概計參拾壹萬圓其ノ

三越後清水越ト云フ上野運路ノ開鑿此ノ工ヤ明治七年中人民ノ協力ニ出テ其ノ工ヲ竣フト雖トモ運輸未タ十分ノ便ヲ得ル能ハス依テ之ヲ改修セントス其ノ四大谷川運河ノ開鑿茨城縣茨城郡北浦ト涸沼トノ間ヲ開鑿シ運路ヲ那珂港ニ取ル其工費二拾萬圓ニ過キサルヘシ尋テ那珂港ヲ修築スルノ設計ヲ爲サントス其ノ五阿武隈川ノ改修該川ハ源ヲ白川ニ發シ福島ヲ經屈折凡三十餘里ニシテ海ニ達ス然レトモ其ノ海口嶮惡ニシテ船泊ニ便ナラス依テ同川ヲ修浚シ更ニ運河ヲ疏鑿シテ鹽竈ノ内海ニ達シ以テ野蒜ノ新港ヲ合スルヲ得ハ福島地方ノ便利ヲ得ル又少小ニアラサルヘシ其ノ六阿賀川改修新潟縣下阿賀川ヲ改修シテ會津ノ運便ヲ開ク其ノ七印旛沼ヨリ東京ヘノ運路印旛沼ヲ檢見川ニ連接シ深川新川ニ通ス工費凡貳拾餘萬圓トス以上ハ東北諸州水陸運路ノ便利ヲ與フル其ノ大概ヲ擧ルノミ之ヲ實施スルカ如キハ宜ク緩急ヲ量リ該地運輸諸物品ノ價格ヲ査算シ工費ノ如キハ現今第一國立銀行ヨリ借入起業セントノ目算モ之レアリ(其期至リ尚可相伺積リ)是等ノ如キ第一着ニ擧行セントス中ニハ追々人民ノ協力ニ成ルモノアルヘシト雖モ或ハ其費額ノ幾分ヲ補給セサルヘカラサルアリ或ハ全ク官設ニナサヽルヲ得サルモアルヘシ是等ノ經費モ亦前載ノ參百五拾萬圓中ヨリ支出シ以テ漸ク開物ノ效ヲ奏セントス

豫算高

總高金六百萬圓

但地方殖產資本及華士族等一萬三千戸ニ充ル諸入用豫算第一等ヨリ第三等ニ至ル

此ノ譯

五百貳拾五萬九千圓　後年返納ヲ要スル分

内

百七拾五萬九千圓　第一等一萬三千戸ノ分

此ノ一戸當リ百參拾五圓參拾錢强

此ノ一箇年返納高四圓五拾壹錢

著手初年ヨリ十箇年据置三十年賦ノ割

參百五拾萬圓　第三等

三府三十五縣殖産資本

七拾四萬千圓　後年返納ヲ要セサル分

總反別九千百町歩

此ノ譯

水田反別三千九百町歩　畑反別五千二百町歩

但方法中三町歩以内一町歩以上ヲ出シ實地開墾反別ハ一町歩ニ不足スル等ノ違ヒアリ一町歩以下ハ唯立算ノ目途ヲ立ルニアルノミ

第一等

豫算第一　移住一萬三千戸ニ充ル諸費返納ヲ要ス

高金百七拾五萬九千圓

内譯

金六拾五萬圓

居宅一戸ニ付建坪五合一坪四圓一戸五拾圓宛一萬三千戸ニ當テ如此

金拾六萬貳千五百圓

物置便所一戸ニ付五坪一坪貳圓五拾錢一棟拾貳圓五拾錢宛一萬三千戸ニ當テ如此

金拾五萬六千圓

土屋練塀立ニテ一萬三千棟一棟四坪一坪金參圓ニテ如此

金五萬貳千圓

農具一ト通リ貸渡シ一戸四圓宛一萬三千戸ニ當テ如此

金參萬九千圓

第一等ニ準シ二箇年間種物貸渡ス一戸金參圓宛ニテ一萬三千戸ニ
當テ如此

金壹萬九千五百圓
二箇年間農具修繕費一戸壹圓五拾錢宛一萬三千戸ニ當テ如此

金六拾五萬圓
食料二箇年平均一戸一箇年麥十石ヲ給ス二年間ノ給與ニテ二十石
代ヲ一萬三千戸ニ當テ如此

金參萬圓
農馬及馬具飼料等見込

豫算第二　返納ヲ要セサル分

高金七拾四萬千圓
內

金參拾七萬七千圓
水道々路略算但此ノ高ニ限リ端算アルハ前後ノ豫算ニ關ス

金拾五萬六千圓
水田一戸三反歩宛戸數一萬三千戸ニ付合反別三千九百町一反ニ付
地ナラシ四圓宛ニテ如此

金七萬八千圓
畑一戸四反歩宛全戸數ニ付合反別五千二百町一反歩ニ付荒起シ壹
圓五拾錢宛ニテ如此

金參萬圓
遠隔ノ縣ヨリ移住スル者ニ限リ旅費見込

金拾萬圓
官宅地諸役給料道路等入費概算

豫算第三

開墾反別高九千百町歩

内譯

水田反別合三千九百町歩　畑反別合五千二百町歩

第三等

豫算　地方廳殖産資本月賦返納ヲ要ス

高金參百五拾萬圓

此ノ一地方當リ金九萬貳千圓强但三府三十五縣

【解說】利通ハ曩キニ華士族カ封土封祿ヲ奉還シ常職ヲ解カレシ以來往々生業ヲ失ヒテ糊口ニ苦シムモノ尠カラサルヲ憂ヘ九年八月内務省ニ授産局ヲ置キ士族授産ノコトニ當ラシメ又殖産興業ノ發達ヲ計畫セシカ西南ノ役起ルニ及ヒ一時之レヲ中止シタリ今ヤ戰亂ノ平定ニヨリ人心モ安堵セシヲ以テ具體的方法ヲ立案シテ裁可ノ指令ヲ請ヒタルモノナリ是ニ於テ政府ハ利通ノ建議ヲ容レ起業公債ヲ發行シテ募集シタル資金ヲ以テ次ノ事業ニ投スルニ至レリ

科目	支出金額
野蒜築港費	六七八、一九四、二四五圓
新潟築港費	二一、六〇二、八〇六
宮城山形兩縣下新道開鑿費	一〇一、六〇四、七一六
岩手秋田兩縣下新道開鑿費	九三、三四九、三七五
那須原野水路開鑿費	二二、七〇七、〇〇〇
鹿兒島縣下鹽田修築費貸下	五三、九一八、二六一
群馬新潟兩縣境清水越新道開鑿費	二二五、三〇八、一七四
猪苗代湖疏水費	三二一、一一〇、一九九
阿仁鑛山開坑費	一、一三八、二〇八、八九八
院内鑛山開坑費	四七六、二〇〇、〇〇〇
油戸炭山興業費	四八、六〇八、二九八

東京高崎間鐵道線路測量費　五、九七四、八〇五
京都大津間鐵道建設費　九五二、一四〇、〇〇〇
敦賀大垣間鐵道建設費　一、五五〇、一七〇、〇〇〇
幌内炭鑛開鑿岩内炭鑛改良費　一、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇
勸業經費　二、六七二、四二三、二四八
起業公債募集費　九九、九八八、〇三〇
常用部繰入額　三八、四九一、九四五
合計　一〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇

斯クテ三月十八日大藏省ニ訓令シテ確實ナル銀行ヲシテ募集取扱セシムルト共ニ其ノ指揮監督ヲ命シ四月三十日ニ至リ愈壹千貳百五十萬圓ノ内國債募集ノコトヲ發表シ五月一日大藏省ハ起業公債證書發行條例ヲ達シ第一國立銀行及ヒ三井銀行ヲシテ事務ヲ取扱ハシム而シテ證書額面百圓ヲ發行價格八十圓トシ年六分ノ利子ヲ附スルコト、ナシ政府ノ實收ハ壹千萬圓ノ豫定ナリキ抑モ内國ニ於テ公債ヲ發行シ國民一般ヨリ資金ヲ募集セシハ實ニ之レヲ以テ嚆矢トスルカ故ニ當事者ハ其ノ結果如何ヲ憂慮セシカ應募者意外ニ多ク申込最終ノ期乃チ八月三十一日ニ至リ總計貳千四百七十七萬五千貳百五十圓ノ巨額ニ達シ超過額ハ割戻スノ好成績ヲ呈セリ

一六三三　三條公への伺書（明治十一年三月七日）

（福島縣安積國營開墾事業ニ關スル調査概要）

【按】福島縣安積疏水事業着手ノ議ヲ提出シタルモノナリ

原野開墾之儀ニ付伺書

本年三月六日付ヲ以テ相伺候一般殖産及華士族授産ノ儀ニ付尚實際ノ緩急篤ト勘考仕候處二族授産ノ如キハ各地方ノ便宜ニ就テ措置セシム可キハ勿論ニ候得共東北地方ノ如キハ人煙稀疎從テ所在荒蕪ノ原野散在シ甚

シキハ青森縣下三本木原ノ如キハ一原野ヲ以テ東西二十里餘南北十餘里ニ連續シ其間耕地宅地僅ニ百分ノ二ニ居レリ餘ハ皆曠漠ノ原野ニ係ルモノ右等諸原野概ネ水木ニ乏シク且他ノ開墾ノ氣勢ヲ沮ム者(追テ處分ノ方法取調可相伺積)アリテ然カク荒蕪ニ委スト雖トモ究竟人口ノ乏シキニヨルハ萬疑ヲ容レサル所以也故ニ卽今已ニ着手シ得ヘキ地ヨリ人口增殖ノ方策ヲ建ツルハ右急務ト被存候因テ其ノ地ヲ調査爲致候處福島縣下安積郡對面原近傍諸原野ノ儀ハ諸般便宜ノ地ニシテ總テ四方通達ノ位置ヲ占メ甚タ開墾好適ノ趣(殊ニ開成山ノ開墾地ニ近接シ同地ノ事業ヲ助成スヘキノ便利有之)只一ノ水利缺クモ右原野ノ最寄猪苗代ノ湖水ヲ疏通スレハ總テ灌漑ノ見込(此疏水ノ經費許多ナリト雖トモ開墾新地ニ沃クノミナラス水利ノ及フ所最寄古田ノ旱損ヲ防キ許多ノ利益ヲ生スヘク又湖畔ニ於テ稍一萬石ノ田地ヲ得ヘシト古來ノ唱呼ニ有之候)モ相立候得ハ此ノ地ヲ東北荒蕪地移住開墾第一着トナシ之ニ篤實ノ士族ニ限リ相應ノ給貸ヲ爲シ(平民モ亦同シク移住ヲ許ス)移住開墾セシムルニ於テハ則チ同族授產ノ聖意ニ叶ヒ所謂一舉兩得ニ可有之御許可ノ上ハ尙實際詳悉取調可相伺候條篤ク御詮議ノ上可然御裁許被下度此段相伺候也

十一年三月七日　　内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

追テ本文經費ノ儀ハ一般殖產華士族授產方法御裁可ノ上ハ其ノ第一等豫算金額ノ内ヲ以テ相辨候積有之候

該事業ハ東北地方移住第一着手ニシテ肝要ノ儀ニ付勸農局ノ直轄トナシ地方官ノ恒議ヲ以テ管掌セシメ稍成功ノ上地方官ヘ專任爲致候積有之候右移住ニ付地方官心得書別ニ當省ヨリ布達ノ積追テ可相伺候

福島縣下岩代國安積郡字對面原及接近諸原野開墾方法

第一條　華士族以下此ノ地ニ移住シ農業ニ從事セントスルモノハ此ノ方

法ニ準據スヘシ

第二條　此ノ地ニ移住センコトヲ願フ者ハ現住地方廳ヲ經テ勸農局ノ許可ヲ得式ニ從テ誓文ヲ出スヘシ

第三條　第二條出願ノ前後ヲ問ハス其遠隔ノ地ヨリ移住ヲ請フ者ヲ以テ先トシ之ニ次テ其ノ近傍ヨリ移住スル者ヲ許ス

第四條　此ノ方法ニ由リ移住ヲ請フ者ハ實際農業ヲ營ムニ耐フヘキ者ト認ムルニ非サレハ其ノ請ヲ許サス

第五條　第四條ノ許可ヲ得テ移住スルモノハ移住地方廳ノ所管タルヘシ故ニ送籍ノ手續ヲナスヘシ

第六條　開墾成業ノ期限ヲ四年間トス此ノ年期中開墾地ニ關スルノ諸務ハ總テ勸農局開墾事務官ノ所管タルヘシ

第七條　移住一戸ニ充ルノ土地ハ田畠宅地合テ三町歩以内一町歩以上ヲ限ルト雖トモ實地請願ノ趣ニ由リ尚增減ヲ爲スヲ得ヘシ

第八條　移住人ニ割リ與ヘル地所ハ新ラ起シヲ限リ官費ヲ以テ之ヲナシ地ナラシ以下播種耕耘等ハ總テ各自ノ勞力ニ係ルモノトス

第九條　第八條ノ地ナラシ一戸一箇年ニ付凡ソ一町歩ヲ成功セシムルモノトス

第十條　荒地ノ開發並ニ道路疏水等土功ノ費用及第十三條ニ掲ル旅費ハ之ヲ官費トナシ償還ヲ要セス

第十一條　一旦官給ニ附シ他日償還ヲ要スヘキモノ左ノ如シ

居宅	十二坪五合	萱屋根　疊建具共
物置	五坪	
便所		
肥小屋	四坪	
農具	代金四圓	
同修繕	代金壹圓五拾錢	

食料　一日一人麥七合小兒三合宛二年間

種子　代金參圓

但農馬ヲ使用シ得ル者ハ此ノ外農馬・馬屋・農馬具・馬飼料ヲ給ス

第十二條　貸與ニ係ルモノハ總テ本人ノ請願ニ由ルハ勿論ニ付或ハ家屋ヲ狹クシ又ハ物品ヲ減スル等隨意タルヘシト雖トモ定規ヲ超過スルカ如キハ之ヲ許サス

但自費ヲ以テスルモノハ隨意タルヘシ

第十三條　華士族ニ限リ開墾地ヘ移轉スルモノハ一日十里詰一人ニ付金參拾錢ノ割ヲ以テ里程及人員ニ應シテ旅費ヲ給與スヘシ

但二年未滿ノ小兒及二十里以內ヨリ移轉スルモノハ之ヲ給セス

第十四條　農馬ハ多數ノ田園ヲ耕シ且實際馬ヲ使用シ得ルモノニ非ラサレハ之ヲ貸下セス飼料其ノ他之ニ從フ

第十五條　第十一條ニ掲ル居宅其ノ他ノ費用貸與ニ係ルモノハ十箇年據置後三十箇年賦ヲ以テ償納セシムヘシ

第十六條　第十五條ノ金額ハ正確ナル保證人ノ連署ヲ以テ拜借證書ヲ出スヘシ

第十七條　開墾地ハ各個開墾起業ノ初年ヨリ二十箇年間無代貸渡年季明後三十箇年間ハ定租ノ半ハ減スヘシ

第十八條　貸下年季中ト雖トモ開墾成功ノ者ニ限リ無代價ノ券狀ヲ下附シ土地所有ノ權ヲ與フヘシ

但所有ノ權ヲ與フルト雖トモ起業以後二十箇年間ハ免稅タルヘシ

第十九條　土地所有權ヲ有スル者ト雖トモ起業以後二十箇年間及二十箇年ヲ過タルト雖トモ官ノ貸與金額ヲ償却セサル間ハ該地ノ賣買讓與ハ勿論質入書入ヲ爲スヲ禁ス

第二十條　官ノ貸與金ニ係ル建物及物品モ亦第十九條ニ準ス

第二十一條　移住者官ノ許可ヲ得スシテ他所ニ移轉スルヲ許サス

第二十二條　不得止事故アリテ他ニ移轉セントスルカ或ハ地所建物等ヲ賣却又ハ讓渡セント請フ者アルトキハ其ノ事柄ニ因リ或ハ許可スルコトアルヘシト雖トモ貸與ノ金額ハ一時ニ還納セシムヘシ

第二十三條　移住者ノ中若シ懶惰放逸ニシテ農耕ニ怠リ到底成業ノ目的ナキ者ハ耕地及建物等ヲ還納セシムヘシ

但本文ノ場合ニ於テハ兼テ力役ノ日數ト建物及物品ノ毀損料並夫食其ノ他既往費消ニ係ルモノヲ計算シ其ノ殘餘ニ係ル者ハ力役ヲ以テ之ヲ償却セシムヘシ

第二十四條　移住人祿券ヲ有スル者アルトキハ之ヲ官ニ預ルヘシ其ノ抽籤ニ當ルトキハ尙利子ヲ生スヘキ方法ヲ以テ之ヲ預リ徒費スルヲ許サス或ハ第十五條ノ償還ニ充セシム

第二十五條　此ノ移住ヲ請フ者其ノ所有祿券ノ利子年額六拾圓以上ニ及フ者ハ該地ノ新ラ起シヲ除クノ外前記ノ給貸ニ預ルヲ得ス但シ開墾ヲ要スルカ爲ニ自費ヲ以テ移住ヲ望ムモノアルトキハ篤志者ニ限リ之ヲ許スヘシ

第二十六條　第二十五條請願ノ趣ニ由テハ官ノ都合ヲ以テ一時官設ノ家屋農具ヲ貸與シ祿券籤當リノ節完納セシムルコトアルヘシ

第二十七條　第二十五條第二十六條開墾建築以下總テ自費經營ニ係ルト雖トモ水利道路新ラ起シ及ヒ無代價貸渡年季明キ後賦稅等ハ他ノ移住人ト等ク恩典ニ預ルヲ得ヘシ

第二十八條　此方法ハ實際ノ都合ニ因リ內務卿ノ命令ヲ以テ加除改正スルコトアルヘシ

福島縣下字對面原外諸原野開墾ニ付諸入費豫算高金六拾五萬千四百八拾貳圓

此ノ譯

金貳拾八萬六千圓　返納ヲ要スル分

但豫算第一　返納ヲ要セサル分

金參拾六萬五千四百八拾貳圓

但豫算第二
豫算第三

豫算第一　移住二千戸ニ充ル諸費一時官給ニ係リ後年償還ヲ要スル分

高金貳拾八萬六千圓

內譯

金拾萬圓

居宅一戸建坪十二坪五合一坪金四圓一棟五拾圓宛二千戸ニ當テ如此但萱屋根壁土臺造作疊建具迄

金貳萬五千圓

物置便所一棟作リニシテ一棟五坪金貳圓五拾錢一棟拾貳圓五拾錢宛二千棟ニ當テ如此尤本宅ニ建添

金貳萬四千圓

土屋練塀立ニテ二千棟四坪一坪金參圓一棟拾貳圓宛ニテ如此尤耕地最寄ニ建ル

金貳萬圓

農馬・馬屋農馬具・馬飼料貸與見込

金八千圓

農具一切貸渡一戸四圓宛二千戸ニテ如此

金六千圓

諸貸與期限總テ二年間トス此ノ間ノ諸種物代一戸參圓宛トシ二千戸ニ引當テ如此

金參千圓

第一期間農具修繕費一戸壹圓五拾錢トシ二千戸ニ引當テ如此

金拾萬圓

食料一年間麥安十石宛二年間ニ充二十石此ノ代金五拾圓(一石二圓五十錢)二千戸ニ引當如此

豫算第二　同上官費支償ニ係リ償還ヲ要セサル分

高金拾八萬百貳圓

猪苗代湖ヨリ安積郡對面原外諸原野ヘ疏水並餘水ヲ以テ安積岩瀬二郡旱魃村々灌漑ノ積右疏水及右ニ關係ノ水利入費概算高

内

金五萬八千四百四拾四圓

此ノ譯

水道長千八百九十間

是ハ耶麻郡山潟村猪苗代湖畔ヨリ安積郡安子ヶ島村境沼上山峠迄實測間數高方位卯ノ正中

内

百九十間　堀割

湖水水際ヨリ切貫口迄　此ノ賃金九千五百圓

但堀割深五間幅平均二間一間ニ付金五拾圓宛岩立アリ水吸手數アリ石垣築立アル分見込

千七百間　切貫

右堀割ノ次ヨリ沼上山峠下一本松迄但シ一本松ハ峠ノ標木ノ直下ニ方ル

此ノ賃金貳萬五千五百圓

但切貫堅六尺幅四尺一間ニ付金拾五圓宛

勾配貫長百二十間

右堀割尻ヨリ一本松迄千七百間勾配下リ長三十間ノ横貫四箇所堀込横貫ヨリ左右ニ堀分ル尤モ風ヲ送リ出水ヲ引出シ堀貫ノ土石ヲ

引出ス等大體一年間ヲ期シテ成業ヲ要スルカ爲メニ設クルノ積

此ノ賃金千貳百圓

但堅五尺幅四尺ノ切貫一間ニ付金拾圓宛

風穴長百間

是ハ水道上ヨリ直下シテ空氣ヲ送ル天間風十箇所ヲ堀下ス一箇所直下十間宛ニテ如此

此ノ入用金千圓

但一間拾圓宛

ポンプ五個但左ノ五馬力ニ應ス

是ハ湖水ノ際堀割ニ一個堀割尻ヨリ切貫ヲ經テ右一本松迄ノ間前條勾配貫四個所ニ各一個宛ニテ合五個ハ切貫底出水引上ケニ備

此ノ代金貳千圓

但一個四百圓宛

同水管長三百間

是ハ勾配下リ貫三十間ニ付水管下リ上リ共一口六十間五口分ニテ如此

此ノ代金九百圓

但一間ニ付參圓宛

蒸氣器械五個但五馬力

是ハポンプ運轉ニ備ヘポンプ一個ニ付一個宛

此ノ代金壹萬圓

但一個貳千圓宛是ハ使用後賣却スルノ積

薪

是ハ蒸氣器械ニ焚用スル分最寄官林ヨリ生木伐出ス積

此ノ代金參千六百圓

但一箇年間蒸氣一個ニ付一日貳圓宛ニテ如此

器械方十人

是ハ運轉一個ニ付一人宛晝夜ニ付交代二人

此ノ給金千八百圓

但一箇年ノ積一人一箇月拾五圓宛

火焚夫七千二百人

是ハ蒸氣一個晝夜ニ付四人掛リ晝夜交代一箇年分

此ノ賃金千四百四拾圓

但一人一日貳拾錢宛

器械運轉取立共

此ノ入用金凡千五百圓

但東京ヨリ場所迄海陸運入費取立共外油等ハ略ス

金四萬九千六百圓

此ノ譯

水道長一萬八百間

是ハ湖水ノ沼上山峠下迄引下セリ五百川ニ落シ込五百川ヲ下ル凡ソ三里餘ニテ該川丸守村上流字熱海ノ上手ニ横堰ヲ打此ノ横堰ヨリ堰上テ第一番ニ對面原西南ノ山手ヲ横斷シテ牛庭原ニ至リ岩瀨郡ヘ引渡スノ水路凡五里ニテ如此

內

八千間　山手堀割

此ノ入用金參萬貳千圓　但一間ニ付四間宛

二千八百間　山手切貫

此ノ入用金壹萬六千八百圓　但一間ニ付六圓宛

湖水水際水門一箇所

五百川ヨリ對面原ヘ堰上ル横堰一箇所

五百川ヨリ對面原ヘ引移ル堰口水門一箇所

此ノ入用金八百圓

外小水路並水番小屋小水門等ハ略ス

金參萬五百圓

此ノ譯

水道長四千三百二十間

是ハ湖水ノ水平數尺ヲ減スルト爲ストキハ別圖ノ戸ノ口落淺クナリテ布藤堰ニ通セス因テ該堰ノ敷下ケヲ爲サヽル能ハス然シテ該堰ノ堰口ト布藤村迄僅ノ高低ナレハ此ノ堰ニ代ルニ別繪圖ノ長瀨川ヲ通スヘシ長瀨川ヨリ布藤村迄凡二里許ニテ十分ノ高低アリ水路モ難カラス因テ前條ノ間數ハ長瀨川ヨリ布藤村ニ達スルノ積ニテ如此

此ノ入用金貳萬千六百圓

但一間ニ付五圓宛切貫堀割等ヨリ其ノ間數實測ニ由ラサレハ分チ難シ尤堀割多クシテ切貫少ナケレハ先ツ五圓ニテ堀割切貫平均ノ略算ヲ立ルノミ

水道長三百二十間

是ハ別圖戸ノ口ノ堰口モ同樣戸ノ口ノ落口淺クナリテ水量ハ減スヘシ別圖ノ通運會社ノ西ヨリ北ニ掛リ三百二十間ヲ堀割レハ戸ノ口堰口ヨリ堀割尻迄凡ソ六尺ノ水落チアリ因テ此所ヲ新規堀割ト見テ間數如此

此ノ入用金六千四百圓

但深平五間幅平二間ニ付貳拾圓宛

湖水敷下ケ長五十間

是ハ別圖通運會社ノ南淺瀨アリ此ノ敷下ケヲ爲サヽレハ戸ノ口堰ニ通セス因テ敷下ケ大略如此

此ノ入用金貳千五百圓

但深一間横幅二間一間五拾圓宛水溜メヲ爲スノ手數共

小以金參萬五百圓

豫備

此ノ金四萬千五百六拾貳圓但前高ニ三割ヲ增ス

其計金拾八萬百貳圓ニテ總高ニ合ス

豫算第三官備ニ係リ後日償還ヲ要セサル分

高金拾八萬五千參百八拾圓

内譯

金百圓

是ハ勸農局實地派出假ニ開成山福島縣出張廳ヲ以テ開墾事務本局トナス可ク然レトモ水利開墾等場所ノ都合ニヨリ所々滯在手配アリ滯在中ハ別ニ官宅ヲ設ケス最寄村吏ノ屋宅ヲ借リ受クルト見做シ其ノ手當凡積

金七千圓

是ハ開墾水利測量手傳人夫測量諸入用概算

金五千圓

是ハ學校十棟建設略算

金千圓

是ハ醫員私宅三棟建設略算

金貳千圓

是ハ乘馬農馬（最初馬耕ニ用フ）乘馬具・馬耕器械共略算

金貳萬五千圓

是ハ取締二十人農牧夫百人學校教師二十人事務局小使等十人諸給料二年間略算

金貳千圓

道路開通費略算作道ノ如キハ移住人ヲ以テ之レニ充ツヘシ

金壹萬圓
田間水路開通費略算
金四萬圓
水田反別一戸五反宛二千戸ニ付千町歩地ナラシ迄
但一反四圓宛
金壹萬八千圓
畑反別一戸六反宛二千戸ニ付千二百町歩荒起シ迄
但一反壹圓五拾錢
金貳萬四千圓
是ハ移住人二千戸一戸四人ト見做シ一人十里參拾錢宛ニテ平均百里ノ里程ト見積リ一戸拾貳圓宛ニテ如此
小以拾四萬貳千六百圓
金四萬貳千八百八拾圓

是ハ豫備二割ヲ設ケ置ク
豫算第四　開墾反別概算
總反別二千九百七十町歩　別紙添
内譯
二百町歩　宅地　但一戸一反歩宛二千戸ニテ如此
千町歩　水田　豫算第三ニ有之反別高
十町歩　宅地　取締官舍醫員自宅農牧夫官舍學校敷地等略算
三十町歩　水路
三十町歩　道路
百町歩　豫備地　別紙方法書ニ此ノ譯ヲ記ス
四百町歩　山林　秣場
千二百町歩　畑
小以

右豫シメ一戸何町何反歩當リヲ出サス實地ノ都合ニ寄テ增減シ若シ右總反別ニテ不足ヲ生スルトキハ最寄田村石川岩瀨安達四郡ノ原野ヲ選テ之ニ充ツヘシ

【解說】起業公債募集ノ資金ヲ以テ最初ニ着手セルハ福島縣下ノ開墾ニシテ猪苗代ノ湖水ヲ疏通シテ對面原ヲ開墾シ華士族幷ニ一般平民ヲ授產セシメンコトヲ企圖セルナリ乃チ奈良原繁ヲ內務省御用掛ト爲シテ事業ノ經營ヲ監理セシメ南一郎平ヲシテ工事設計ヲ擔任セシム由來安積郡ハ有名ナル大原野ナリシモ一郡ノ收穫僅ニ米三萬石ニ過キサリキ而シテ疏水工事ノ成ルニ及ヒ久留米・二本松・鳥取等ヲ始トシ士族ノ一家ヲ擧ケテ移住スルモノ多數ヲ占メ現時郡山市ヲ中心トシテ東北ノ一大寶庫タルノ觀ヲ呈スルニ至レルモノ蓋シ淵源ヲコヽニ發ス

【參考】其一「安積疏水志」抄

明治九年十二月內務卿大久保利通先ツ水利開墾ノ業ヲ起シ汎ク殖產ノ隆興ヲ計ラントス而シテ其根據地ヲ東北地方ニ求ム因テ內務屬高畠千秋及ヒ南一郎平ヲ派シ陸羽地方ノ諸原野ヲ巡視セシム

明治十年四月曩ニ高畠內務屬等ノ諸原野巡視ノ命ヲ受クルヤ北ハ青森三本木原ヨリ南ハ野州那須野原ニ至リ所在荒野ノ渺漠タル中ニ就テ福島縣下安積郡對面原以下諸原野ハ地味最モ肥沃ニシテ且國道及ヒ阿武隈ノ大河ニ接近シ其西北ニ當リ猪苗代ノ大湖アリ是レ水路ヲ開鑿シ以テ對面原等諸原野ヲ灌漑スルノ便アリ洵ニ拓殖至適ノ地タルヲ認ム是ニ至テ復命ス

尋テ內務省ハ對面原及附近原野凡四千町歩餘ノ地ヲ以テ開墾着手ノ地トナシ猪苗代湖ノ潴水ヲ決鑿疏導シテ彼ノ原野及ヒ安積岩瀨諸郡ヲ灌漑シ以テ拓殖ノ便ヲ開キ幷ニ古田ノ旱害ヲ除キ現業ノ擧ルニ伴フテ以テ民業工事ヲ誘導興起セシメンコトヲ內決ス

九年六月聖上巡幸ノ次同村（福島縣安積郡桑野村）ニ行幸開成館ヲ以テ行在所ニ充テラレ參事山吉盛典權參事中條政恒等ヲ召シ開墾ノ狀ヲ垂問シ給ヒ深ク開拓ノ功ヲ喜ハセラレ金幣ヲ賜ハル驛ヲ此ニ駐メ給フコト二日聖駕ニ先ンシ大久保内務卿ハ來テ大槻原開墾ノ實況ヲ視察シ權參事中條政恒其開拓ノ顚末ヲ開述ス此年十一月（七月ノ誤）大久保卿ノ聖駕ニ扈シテ歸京スルヤ深ク叡旨ノアル處ヲ體認シ專ラ東北地方ノ開拓ヲ企圖スト云フ是此ノ疏水ノ大利益ヲ生シテ今日アル原因ナリ

【參考】其二　大藏卿松方正義安積疏水開通式祝詞（明治十五年十月一日）（内務省記錄）

政府ハ明治十五年十月一日ヲ期シ通水式ヲ擧行シ爰ニ始メテ水路ノ全部ヲ疏通セルヲ以テ岩倉右大臣勅ヲ奉シテ臨場其他宮内卿・地方長官・次官以下來會洽ク疏水工事ヲ巡覽シ開成山大神宮ニ於テ通水奉告祭アリ以テ通水式ニ臨ミ岩倉右大臣以下宮内卿・大藏卿・農商務卿・奈良原監督官以下多數ノ祝詞アリタリ

今疏水工事ニ最モ關係深カリシ松方大藏卿ノ祝詞ヲ示セハ左ノ如シ

今日疏水式ニ臨ミ聊カ祝辭ヲ呈ス夫レ水路工事ノ前後ヲ注目スレハ遠ク水源ヲ猪苗代湖ニ取リ原野開墾ノ土地ハ勿論近ク各村ノ旱田ニ溉キ終ニ阿武隈川ニ流出シ其工ハ堅石ヲ碎テ水ヲ疏シ數十ノ隧道ヲ設ケ池沼ヲ埋メテ橋ヲ架シ其功壯美堅牢ヲ極メ數年ナラスシテ功ヲ奏スルニ至レリ蓋シ迅速此ノ如キノ好結果ヲ得タルハ擔任セシ奈良原繁・南一郎平兩氏ノ盡力ニ由ラサルハナシ其他ノ從事者ニ至ルマテ同心協力能ク勉强以テ事ニ耐ヘ精勵以テ之ニ當リ遂ニ此偉業ヲ大成スル所以ニシテ誰カ稱賛セサランヤ抑此ノ疏水ノ計畫ハ故大久保利通内務卿ノ職務ヲ奉セシ時ノ創始ニシテ起業ハ參議伊藤博文内務卿タリシ時其遺志ヲ繼キ明治十二年十月ニ着手セリ當初其目的ハ一ハ有志士族ノ産業ニ便ナラシメ一ハ近傍故田ノ水利ニ裨益ヲ與ヘントノ企圖ナリシニ此業成ルヲ俟チ果シテ其

初意ニ違ハス遠キハ九州中國四國其他近縣ノ士族等奮然故郷ヲ去テ此地ニ移住シ孜々トシテ國産ヲ起シ從テ自家ノ恒産ヲ鞏固ナラシメント拮据黽勉シ且ツ故田ノ如キモ其水利洪益ヲ受クル淺少ナラスシテ當初ノ目的ハ兩ツナカラ既ニ達スルニ垂ントス況ヤ此舉タル常ニ當地方ノ幸福ノミナラス乃チ邦家ノ資産ヲ増加シ以テ民業ヲ助成スルノ成績アルハ實地ニ徴シテ明ラカナリ之レ國家ニ對シ豈ニ慶賀セサル可ケンヤ然リ而シテ將來維持ノ方法亦確定スヘキノ時ナリ是レ正義ノ默止スル能ハサル所ナリ敢テ數言ヲ述ヘ以テ祝詞トス

明治十五年十月一日

參議兼大藏卿正四位勳一等松方正義

【參考】其三　公爵松方正義談話「大久保公と安積疏水」

大久保サンノ死後乃チ明治十二年ニ至ツテ此ノ疏水事業ハ我國未曾有ノ難工事テアルノト猪苗代湖沿岸ノ農民カ用水ノ減量ヲ心配シテ反對ヲ唱ヘタ爲メトテ工事中止ノ議カ朝野ノ間ニ起ツタ予ハ勸農局長テアツタカラ實地調査ノ命ヲ受ケテ出張シタカ其ノ結果實ニ前途有望有益ナル事業テアルコトヲ確信シ斷然中止ノ不可ナル旨ヲ復命シタ幸ニ伊藤内務卿ハ之レヲ容レ朝議ハ遂ニ工事ヲ續行スルコトニ決シ其後着々工事ヲ進メ十五年ニ至ツテ愈成功シ疏水式ヲ擧行シタノテアル其ノ當時予ハ内務卿ノ職ニ在リ岩倉右府ニ隨ヒ式ニ臨ンタカ公ノ往事ヲ追懷シテ左ノ數首ヲ詠シタ

斷而行之功不愆　穿山通流路幾千
欲爲邦家開沃土　毀譽不問期後年
昔日荒原今稻田　群人奠酒向祠前
神靈有知應來享　千載偉業猪湖邊

觀沼上瀑

猪湖遙在白雲邊　造洞通流知幾年
正是禹功々成處　飛泉萬丈掛青天

福島客舍觀甲東翁書幅有感

履險排難奏偉勳　精神奕々自超群
壁間遺墨不堪讀　虎飛龍躍慘如雲

【參考】其四　樞密顧問官松方正義安積疏水志奉呈表（明治三十九年正月）（安積疏水志）

臣正義言ス夫レ水土ヲ平ラクルハ富國ノ要道利民ノ根源ナリ曩ニ安積疏水ノ擧タル地ヲ開キ田ニ灌キ產ヲ士族ニ授クルヲ以テ目的トス實ニ故内務卿大久保利通ノ籌畫スル所ニ係ル當時臣正義大藏大輔兼勸農局長タルヲ以テ臣ヲシテ之ヲ統轄セシム明治十一年五月伊藤博文利通ノ後ヲ承ケ内務卿ニ任ス時ニ斯ノ業ノ不可ヲ說ク者アリ議論紛興ス翌年博文臣ト共ニ實地ヲ檢シ斷然起工ノ事ヲ決ス是ニ於テ國費ヲ以テ業ヲ始メ擔當諸員其人ヲ得乃チ沼上嶺ノ層巒ニ隧道ヲ通シ猪苗代湖ノ潴水ヲ引キ大瀑ヲ懸ケ奔流ヲ分チ遍ク安積諸原野ニ灌漑シ諸縣ノ士族遠方ヨリ移住シ力ヲ戮セテ開墾シ歲ヲ逐テ緒ニ就キ十四年ニ至リ工事粗成ル是歲　車駕東巡還幸ニ際シ十月十四日左大臣熾仁親王　御代覽トシテ現場ヲ臨檢セラル十五年十月一日右大臣岩倉具視　勅ヲ奉シテ臨場シ通水ノ式ヲ擧ケラル是ヨリ先キ十三年二月臣正義内務卿ニ任セラレ仍ホ其ノ事務ヲ掌ル十四年四月農商務省設置ノ後ハ該省之ヲ管理シ十七年七月又之ヲ内務省ニ移ス既ニシテ内務省之ヲ福島縣ニ委シ縣又之ヲ安積郡ニ付ス爾來風雨動モスレハ災ヲ爲シ堤堰決壞シ修繕維持經費費ラレス屢官府ニ請ヒ特ニ補助ヲ忝シ且郡民多額ノ修築費ヲ備ヘ後顧ノ憂ナキニ至レリ是ニ於テ乎疏水ノ功全ク成リ灌漑周洽シ利澤ノ及フ所山野モ亦稻田ニ化シ從テ戶口繁殖シ百業競ヒ興リ遂ニ一地方ノ富盛ヲ致セリ伏シテ惟ミルニ天皇陛下乾德宏大寰宇ニ照臨シタマフ安積疏水ノ擧ノ如キモ亦　昭

代ノ嘉昵ニシテ郡民ノ齊ク謳歌スル所能ク士族授産ノ實功ヲ收メ海内水土ヲ平クル好模範ヲ開キタルナリ此ノ土ニ住スル者日夜天恩ノ隆渥ヲ仰キ深ク報本反始ノ義ヲ懷ヒ爰ニ郡民相謀リ安積疏水志ヲ編ミ印刷成ルヲ告ク臣正義恭シク此ノ書ヲ　闕下ニ捧ケ拜表シテ以聞ス冀クハ　乙夜ノ覽ヲ賜ハランコトヲ仰企ノ至ニ堪ヘス臣職分ノ關スル所此ノ事ニ終始シ先臣利通ノ遺緒ヲ纘キ微勞ヲ其間ニ效シ成功ヲ見ルニ至リタルハ竊ニ天幸トスル所ナリ今ヤ國家多事ノ時ニ際スト雖モ富國ノ要道利民ノ根源寔ニ此ニ在リ四方之ニ倣フテ起スヘキノ事蓋シ尠カラサルヘシ此ノ書庶幾クハ參考ノ資トスルニ足ラン安積疏水ノ顚末悉ク此ノ書ニ備ハル其ノ中ノ委折今此ニ　宸聰ニ達スルヲ得ルハ誠ニ光榮ノ至トス臣正義謹テ衆ニ代リ奏上ス臣正義誠恐誠惶頓首謹表

明治三十九年一月

樞密顧問官正二位勳一等伯爵松方正義

【參考】其五　安積開墾地ノ經營　（福島縣安積國營事業調査概要抄）

移住民ノ招致及待遇

開墾及移住ニ關スル事務ニ付テハ既ニ述ヘタルカ如ク福島縣其衝ニ當リ先ツ明治十三年土地處分規則ヲ公布シ移住民ノ募集ヲ行ヒタリ卽政府ノ補助ヲ受ケ移住者ノ保護奬勵ノ方法トシテ開墾地一戸當一町五反乃至三町ヲ交付家屋建築費・馬匹・農具・種苗・食糧其他開墾費ヲ貸與シ一戸當三百二十六圓ニ及ヒタリ或ハ農事指導ヲ行ヒ又遠路ノ移住者ニハ旅費ヲ給與スル制度ヲ設ケ全國ニ移住希望者ヲ募集シタル結果遠キハ九州・四國・中國ヨリ或ハ隣縣又縣下諸村ヨリ續々移住シ來ル者五百餘戸ニ及ヒタリ卽久留米藩ノ如キハ明治十一年十月疏水工事着手前ニ移住シ開成山ノ移住者ニ續ク先驅タリシナリ其後明治十三年烏取・高知ノ各藩ヨリ多數ノ團體移住アリ其他岡山藩・米澤藩・松山

藩・棚倉藩・若松藩等ヨリ移住セル者十一團體ニ及ヒ各團體ハ結社團結シテ隣保相助ノ團體運動ニヨリテ開墾事業ノ成功ヲ期セントセリ就中久留米開墾社ト鳥取開墾社・高知開墾社ノ活動ハ世人ノ注意ヲ喚起セル處ニシテ後世殖民事業ニ從事スル者ノ看過スヘカラサルコトナリ　各開墾地ノ移住年月ハ各團體ニヨリテ異ニシ久留米藩ノ如キ明治十一年ニ創リタルモ多クハ明治十二・三年頃ナリト云フ今大正十年十月ノ調査ニ係ル各開墾地ノ所屬村名・移住地名・移住者出身藩名及移住戸數ヲ示セハ左ノ如シ

村名	移住地名	出身藩名	移住戸數
小原田村	大藏壇原	久留米藩	四〇
	久留米藩		一〇
穂積村	四十壇原	米澤藩	一〇
	會津藩		四
豐田村	牛庭原	松山藩	一七
同村	前田正名開墾地		一二〇
大槻村	南原	會津藩	一三
桑野村	開成山	二本松藩	一七
富田村	廣谷原	高知藩	七一
喜久田村	廣谷原	鳥取藩	六九
同村	對面原	棚倉藩	二二
同村		二本松藩	一一
同村前田澤	對面原	久留米藩	一〇〇
丸守村安子ヶ島	對面原	棚倉藩	五
		岡山藩	二
		會津藩	一
合計			五一三

移住成績

各地ノ窮民ハ政府ノ保護奬勵ニ依リ移住シタルモ氣候風俗或ハ農耕方法等ニ慣レス或ハ境遇ノ激變ニヨリ開墾地定着ヲ肯セス機ヲ見テ他ニ轉住離散セルモノ少カラサルモ開墾地ノ天地ニ新運命ノ開發ヲ期待シ日夜精勵同志相協リ營々安積開墾ノ先導者トナリタル者亦尠カラス

各開墾地ノ經過ヲ觀ルニ移住當初結社シ共同一致ノ行動ヲ採リ識見德望アル者中心人物トシテ活動誘掖シタルモノハ成績良好ナルカ如シ

移住民ノ開墾地經營上最モ苦心セルハ農業資金・作物ノ選擇・耕種方法肥料等ナリシカ如シ又生産物ノ販賣日用品・肥料等ノ購入ニ於テ其機關ヲ特設セント企テタル有識者アリシヲ觀テモ開墾地ノ經濟的機關ノ必要ヲ痛感セルコトヲ窺フニ足ルヘシ

各開墾地ノ移住者中辛勞ヲ積ミ汗水ノ結晶トシテ得タル開墾地ヲ後年ニ於テ負債ノ爲餘儀ナク他人ニ轉賣スルノ憂目ニ遭ヒシ人アリシハ移住民ノ經濟的苦心ヲ物語ルモノト云フヘシ

國營開墾事業ノ効果

安積平原四千餘町歩ニ亘ル廣漠タル林野ハ唯徒ラニ雜木草叢ノ繁茂ニ委シ僅ニ附近農民ノ草苅場トシテ放置シ禽獸ノ棲息ニ任セ人影ヲ見ルコト稀ナリシカ國費數十萬圓ヲ投シ四ケ年ノ歲月ヲ費シテ開墾事業遂行セラレ猪苗代湖水ノ疏鑿工事成ルヤ十數里ニ達スル用水路ハ蜿蜒荆棘叢生ノ山野ニ通水シ五百餘戸ノ移住農家ニ依リテ二千餘町歩ノ美田ハ開發セラレ年々數萬石以上ノ米穀ヲ収穫シ又從來年々旱害ノ爲二三割ノ減收ヲ來セシ三千餘町歩ノ舊田ハ潤澤ナル用水ヲ得テ豐穰ノ田ト化シ以テ地方農民ノ耕作ヲ安ンスルニ至レルコト誠ニ偉大ナル事業ト云ハサルヘカラス斯クテ明治初年三萬石ノ米産額

ヲ擧ケシ地ハ今ヤ年々十數萬石ヲ增收スルニ至レリ

數千ノ移住民ハ歸農土着堅實ナル農民トシテ優良ナル農村ヲ創成シ以テ窮民授產ノ目的ヲ達成シタル効果亦偉大ナリシト云フヘシ又事業ノ効果トシテ公租公課ノ負擔ヲ增加シ政府及地方費ノ財政ニ貢獻セル所亦尠カラス

一六三四　三條公への伺書（明治十一年三月十一日　（內務省記錄））

【按】曩キニ內覽ニ供セシ地方制度ノ議案ヲ正式閣議ニ提出セシモノナリ

地方之體制等改正之議上申

利通謹而上言ス抑モ地方ノ體制地方官職制地方會議法地方公費賦課法等ノ制定セサル可ラサルハ別紙主義書ニ辯明スル所ノ如シ依テ今每件草按ヲ起シ就中地方ノ體制地方會議法地方公費賦課法等ノ如キハ近日招集ノ地方官會議ニ附セラレン〻ヲ欲シ拔テ議案トナシ併テ呈進ス偏ニ閣下ノ採擇ヲ仰ク

明治十一年三月十一日　內務卿大久保利通

太政大臣三條實美

【解說】本議案ハ三大重要法案ヨリ成ルモノニテ內容頗ル浩瀚ナルヲ以テ本文ハ省略セリ明治八年四月ノ詔勅ニヨリテ立憲制度ノ端緒開カレシヲ以テ利通ハ愈內治ノ根本タル地方制度ヲ確立シ以テ他日立憲政治ヲ開クノ素地ヲ作ラント欲シ松田道之等ヲシテ調査立案セシメタルモノニテ伊藤參議亦議ニ參セリ第一ハ地方官制ニテ從來ノ大小區制ヲ郡市及ヒ町村區域ニ改ム乃チ一面ニハ國家ノ行政區ヲ爲スト共ニ一面ニハ地方自治體卽チ「住民社會獨立」ノ區域ヲ爲スモノニテ國家ノ事務ヲ掌理スルト共ニ地方公共團體トシテ自治行政ヲ行フ第二ニ於

テハ新タニ地方議會ノ制ヲ設ケ更ニ第三ニ於テハ地方費賦課法ヲ定メ地方費ハ總テ地方住民ノ公議ニ依リテ決定セシメタルナリ卽チ廢藩置縣以後ニ於ケル地方ノ財政ハ地方官職權ヲ以テ任意ニ租稅ヲ賦課徵收シタルモノニシテ地方費ノ豫算決算ノ如キ之ヲ負擔スル人民ハ固ヨリ與カリ知ルコトヲ得サリシヲ今ヤ悉ク府縣會ノ決議ヲ經ルヲ要セシメ町村會ハ別ニ規定ナキモ訓令ヲ以テ各地適宜ニ町村會ヲ開キ豫算ヲ議セシメ町村長ハコレヲ公選トセリ(久シカラスシテ官選ニ復ス)本案ハ我國地方代議制ノ開始ニシテ地方行政ノ新紀元ヲ劃シ自治制ノ端緒ヲ開キタルモノトシテ明治史上ニ特筆セラルヘキモノナリ斯クテ地方官會議ハ四月十日ヨリ開カレ郡區町村編制法・府縣會規則・地方稅規則ノ三大議案ヲ附議シ五月三日悉ク議了シ尋イテ七月廿二日ヲ以テ公布セラルヽニ至リ實ニ我國立憲政體ノ階梯ヲ爲スモノナリ

一六三五　河瀨秀治への書翰 明治十一年三月十三日　（大久保家藏）

【按】深川新燧社ノ參觀ノ期日ヲ報シタルモノナリ

深川行之事ハ來ル十六日午前十時より出張之筈大藏卿申談候間左樣御承知有之度此旨申進候也

三月十三日　利通

河瀨　樣

【解說】利通ハ十六日大隈大藏卿ト共ニ深川摺附木製造所新燧社ヲ視察セントシ內務大書記官タリシ河瀨ニ之レヲ報シタルナリ新燧社ハ利通カ吉井友實等ト共ニ創設ヲ奬勵シタルモノニシテ清水誠社長タリシカ我邦燐寸業ノ嚆矢タリ河瀨ハ初メ勸業寮ニ出仕シ尋イテ內務大書記官ノ職ニアリ利通ノ最モ知

遇ヲ受ケタル一人ナリ

【參考】其一河瀬秀治より大久保への書翰 明治十一年三月十三日（大久保家藏）

來十六日大藏卿御同道深川新燧社へ御扛駕被成下候旨奉拜承候早速同社へモ申通候樣仕ヘク此段御請奉申上候謹言

三月十三日　河瀬秀治

内務卿殿

【參考】其二河瀬秀治談話「大久保公内治の方針」明治三十二年十一月

大久保公の知遇を受けたのは勸業寮に居た時分であつた公は岩倉大使一行の副使として海外を巡遊して來て何でもこれは内治を大にやらなければ不可ぬ征韓論で大破裂をしても海外に押し出すのはマア後の事にして内を治めて大に國の實力を養つた上の事にしなければ不可ないと思はれたらしい其處で警保寮・勸業寮を置いてこれを一等寮にし地理寮・土木寮・戸籍寮等その他にまだ有つたろうが要するに是等の各寮を大久保公は内務卿として統べて居られたが此の組織の中に略大久保公の爲政の方針が現はれて居る大政維新の後ち國内が兎角ごたゞ〳〵として居たのは言ふまでもない話で其上に征韓論以來は餘計物騒であるそんなこんなで大久保公はまづ内治では警察に重きを置かなければならぬ次には人民の殖産興業殊に民業を發達させなければならぬ此の二者は最も内治の重大事であるからそれで警保寮と勸業寮を一等寮にせられたのである警保寮の權頭は村田(氏壽)がやつて居て勸業寮は私・前島さんが今の遞信の方で郵便や電信それに海運の事などをやつて居た土木が林友幸で戸籍の方は杉浦(讓)がやつて居た東京の警保は川路大警視がやつたが是はなかなかの人物であつた公は人民の生命財産の保護は最も大切で之と共に民業を發達さして行かなければならぬと私達にも言はれてひどく鋭意して居られた公の職務に熱心といふものは大變なものであつたが今でも思ひ出す

のは公のあの正大な誠意に對して自分等の力の足らなかつたのがシミ〴〵殘念であつた事である公は部下を使ふに能くその心を人の腹中に置いて其力を信任し部下がやれるだけの事をやらせるといふ風であつたその頃大丞に任せられたのが前島・林・村田・杉浦それに私・少丞は松平正直に武井守正それに新田といふものが居つたが是は死んだ是等の役人に對して言はるゝには此の大丞少丞の選定は決して私一個で選んだのでなく又薩長の手で選んだのでもない全く内閣一般の選任だから諸君も其積りて居られたい隨て各部の擔任者は決して私一個に使はれるとか薩長に使はれるとか思はずに國家の役人である國家の仕事をするといふ積りて自ら任じてやつてくれ且又細かい事は自分は不得手であるから萬事仕事は君達に任すから力一杯やれ其代り責任はおれが引受るのだから何にも顧慮せずにやれと言はれた萬事が斯ういふ行らせ方で部下のものは一生懸命に仕事をすること

が出來た公は省務を人に任して置いて斷乎として動かなかつただから自分共は骨は折れたが安心してやる事か出來た仕事の上の事は過ちがあつても叱らずに責任は一切御自分が引受けられたのである云々

一六三六　三條公への願書　明治十一年三月十四日　（内閣公文錄）

【按】熱海溫泉湯治ノ爲メ賜暇ヲ願出テタルモノナリ

私儀痔疾ニ付熱海溫泉へ入浴仕度二週間御暇賜リ候樣奉願候宜御執奏可被下候以上

明治十一年三月十四日　　參議大久保利通

太政大臣三條實美殿

【解說】利通ハ西南ノ兵亂勃發以來京攝ノ間ニ奔走シ尋イテ戰後ノ經營ニ寧日ナカリシカ本年ニ入リ又宿痾ノ痔疾ヲ發シタ

リキ幾何モナク稍輕快ニ赴キシモ醫師ノ勸告ニ從ヒ次子伸顯ヲ伴ヒ是月廿二日熱海溫泉ニ休養スルコトヽナリ旅館眞誠社ニ投宿セリ

一六三七　岩倉公への書翰 明治十一年三月十五日

【按】別冊ヲ贈リ閲覽ヲ乞ヒタルモノナリ

益御安康被爲成御坐奉拜賀候陳ぇ別冊差上候間猶御熟覽被成下度尤一般殖產華士族授產方法ぇ第三等但書ハ此內御一覽後ニ加入いさし候付要所ぇ津港及道路堀割等大略ぇ目途取調候義ニゟ其內石卷幷ニ新潟港ぇ如キハ既ぇ〳〵着手ぇ目的も相付居近々上申ぇ運ぇ相成居候委曲ハ御直ニ可申上候得共其內草々如此御坐候謹白

三月十五日　利通

岩倉公

猶々明日ぇ新燧社見分として大藏卿同行仕候付不參仕候間左樣御承知被下度奉願候也

【解說】「別冊」云々トハ前述セシ如ク三月六日付ヲ以テ一般殖產及華士族授產ニ關シ三條太政大臣ヘ提出セルモノヲ云フ但シ伺書中第三等ニ更ニ又伺書ヲ加フルト共ニ港灣・道路・運河等ノ實地調査ニヨリ工事着手ノ方法モ立チタルヲ以テ重ネテ上申閣議ヲ開クヘク豫メ公ノ內覽ニ供シタルナリ

一六三八　伊藤博文への書翰 明治十一年三月十五日　（伊藤公爵家藏）

【按】高島炭坑事件ノ調書ヲ廻送シ猶ホ深川出張ノコトニ及ヒタルモノナリ

別冊長崎縣權令よりの到來高島石炭坑事件委舖相分候付則御廻申上候御覽後司法卿に爲心得內覽ニ入置可申候此旨早々拜具

三月十五日

伊藤殿

猶々明日午後深川出張ハ如何ニ候哉先日中井ゟ相咄置候尤小子ハ延遼館ゟ相斷午前より摺附木製造所へ差越候付歸縣出縣可申候別ニ御差支無御坐候ハヽ摺附木製造所へ延遼館御引取縣御出被下候ハヽ御同行可申上如何樣共御都合次第可被成下候大藏卿も同行ゟ筈御坐候也

【解説】是ヨリ先キ高島炭坑騷擾事件アリ長崎縣權令内海忠勝ハ事件ノ調査ヲ内務省ニ提出セシヲ以テ利通ハ之レヲ伊藤ニ廻送シ尋イテ司法卿ノ内覽ニ供セントシタルナリ猶々書ハ十六日新燧社摺附木製造所ヲ視察スルニヨリ延遼館ノ歸途深川ヘ同行ヲ誘ヒタルナリ

一六三九　中井弘への書翰 明治十一年三月十五日　（京都博物館藏）

【按】深川摺附木製造所視察ニ同行ヲ勸誘シタルモノナリ

尙々若御差支モ有之候ハヽ御知セ可被下候假令御出無之共圍場ヘハ參度候付御達置被下度御願申上候

明日延遼館退散懸御立寄可申上御談置候處兼ゑ深川摺附木製造所ヘ爲見分參候筈ニゑ序ニ出張イタシ候事ニ相決申候間貴兄モ御出相成候ゑハイカヽ尤工部卿ヘ一封遣候付同卿延遼館歸懸出張有之候ハヽ御同行ニゑモ宜ク候何分御談ノ上御決着有之度製造所ノ方ハ午後三字ニハ必相濟可申候此旨早々如此候拜答

一六四〇　楠本正隆への書翰 明治十一年三月十五日　（柴田家門氏藏）

【按】脚氣病院設立ノ爲メ舊雲州邸御買上願ニ付キ宮内省ヘ交渉ノ結果ヲ報シタルモノナリ

昨日御談之舊雲州邸宮内省へ云々ノコト今日遂示談候處何分卽今御費用御多端之折四萬之金額ハ御繰合六カ舗趣ニゐ候間左樣御承知有之度昨日モ申上置候通猶又外ニ精々御搜索被成度候最場所モ可成取縮メ費用相減候方ニ御趣向有之候ハヽ如何樣共勘考モ可有之候宮内省ニゐ内話ニ雲州邸モ風致モ宜候ニ付二萬圓位之事候得ハ何トカシテ取留置度往々必ス右樣之場所ヲ要シ候事モ可有之トノ事ニ候シカシ是モ突留タル話ニゐハ無之候得共只御心得迄ニ申上置候付左樣御了知可被下候此旨申遣度草々如此候也

三月十五日　利通

楠本正隆殿

【解説】當時東京市内ニ於テ脚氣病增加セシカハ專門ノ病院ヲ設立スルノ議アリ利通ハ十四日楠本東京府知事ヲ召致シ經費及ヒ敷地等ノコトヲ議セシニ對シ楠本ハ之レカ經費四萬餘圓ヲ得ンカ爲メニ府ノ管轄地タル舊雲州邸(今ノ赤坂見附上閑院宮邸ニ當ル)ヲ宮内省ニ於テ御買上アランコトヲ述フ是日利通ハ宮内省ニ交渉セシカ同省ニ於テモ經費多端ノ折柄ニテ買上ハ不可能ナリシヲ以テ之レヲ楠本ニ報シ猶ホ計畫ヲ縮少スルノ外ナカルヘキ旨ヲ告ケタルナリ

一六四一　伊藤博文への書翰 明治十一年三月十六日（伊藤公爵家藏）

【按】深川行ノ遲刻ト新燧社ノ所在ヲ通知シタルモノナリ

本日僕ニハ無據義有之十時過ニ新燧社ゟ參候ニ付其内無御構中井御同道同社ゟ御出懸可被下候若御待も難圖候付爲念此旨申上候草々拜白

三月十六日　利通

伊藤殿

尙々新燧社場所ハ本所柳原町壹丁目十三番地ニ候

一六四二　伊藤博文への書翰 明治十一年三月十九日（伊藤公爵家蔵）

【按】來訪ヲ斷ハリ三條公邸ニ於テ面談センコトヲ通知シタルモノナリ

本日御退出懸御入來可被下御約束申上置候處兼ゐ條公懇會御吹聽御請申上午後三時よゝ出頭之筈ニ有之退ゐ考出し候自ら賢臺も御同樣与存候間彼席ニゐ御談可申上候爲念右御斷早々如此拜具

三月十九日　利通

伊藤賢臺下

一六四三　三條公への屆書 明治十一年三月廿日（内閣公文錄）

【按】曩キニ熱海溫泉保養ノ儀ヲ願出テシニ許可アリタルニ付キ出發屆ヲ提出シタルモノナリ

拙者儀兼テ願濟之通來ル廿二日當地出立熱海溫泉へ罷越候此段御屆申上候也

明治十一年三月廿日　内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

一六四四　岩倉公への書翰 明治十一年三月廿日（岩倉家文書）

【按】脚氣病院設立費トシテ宮内省ヘ御下賜金ヲ願出テシニヨリ特別ノ盡力ヲ請ヒタルモノナリ

過日來御内談申上候脚氣病院地所之事猶又入費格別相減民有地捜索致候樣東京府知事ゟ申含置同府よりても別ゐ心配百方手を盡候得共差向可然場所無之折角有之場所ハ前同斷格外之高價ニ相及候次第ニゐ如何樣共致方無之就ゐ宮内省よゝ二萬圓御下金相成候得ハ舊雲州邸ハ御用地ニ差出可申跡二萬圓ハ東京府ニおひて借入之都合取計候とり他ニ術策無之尤

御下金ニ御治定ニ相成候得ハ卽今皆目御下渡不相願候ゟも宜假令來年度ニ跨リ候ゟも差支無御坐候付今一應宮内省へ打合セ呉御取究相願候与之事ニ御坐候全體脚氣病院之事厚　御趣意も被爲在候事ゟて幾分カ　御下金有之ゟも御當然与も奉存候付前件之趣御許可有之候樣御厚配奉仰候同邸ハ風致他ニ無比類今日ニ相成候ゟハ難得之地ニ有之最此先決ゟ御不用ニ屬し候事ゟも有之ま〳〵存候と乍楠元ゟも右之考慮ニ渉り候旨も申出候本日於内閣可申上含之處失念仕候付此段楮上ヲ以奉願候昨夜宮内卿ハ相咄置候付明日早目御決答相伺候樣仕度此旨草々　謹白

三月廿日　　利通

岩倉公

【解説】脚氣病院設立費幷ニ敷地ニ關シ利通ハ楠本東京府知事ニ再調ヲ命シタルモ他ニ適當ノ考案ヲ得サリシカハ舊雲州邸ヲ宮内省ニ獻納シテ二萬圓ノ御下賜金ヲ仰キ殘餘ノ二萬圓ハ府ノ借入金ニ依ルノ外他ニ方法ナキヲ以テ更ニ宮内省へ交渉ヲ請フニ至レリ依リテ利通ハ先ツ德大寺宮内卿ニ談スルト共ニ是日岩倉公ニ特別ノ配慮ヲ願ヒタルモノニテ書中「厚御趣意云々ハ聖上亦脚氣病ニ罹ラセ給ヒシカ故ニトノ意味ナリ其後五月ニ至リ利通ノ盡力ニ依リ宮内省ヨリ東京府へ二萬三千圓御下賜ノコトアリ同時ニ亦府ニ於テモ資金ノ調達ヲ得タルヲ以テ地ヲ一ツ橋外柳原邸跡ニトシ脚氣病院ヲ創立シ西洋・漢法兩醫術ヲ以テ治療ヲ施シ吉田亮最初ノ院長トシテ經營セリト云フ

【參考】楠本正隆より大久保への書翰（明治十一年五月六日）（大久保家藏）

兼ゟ御内達御座候通病院建築費之内へ二萬三千圓下賜候旨宮内卿より閣下へ御通知之書狀御添御達之趣大慶不過之全く御高庇ゟより前條之仕合府民之幸福厚く御禮申上候右御答如此御座候也

五月六日　　楠本正隆

大久保公閣下

一六四五　伊藤博文への書翰 明治十一年三月廿一日（伊藤公爵家蔵）

【按】元老院副議長人撰ノコト及ヒ法制局副長官就任ニ關シ河野元老院幹事ニ面議ノ顚末ヲ報シタルモノナリ

益御安固奉敬賀候陳ハ今朝河野幹事へ面會三の條御内評之次第申述且別段ニ愚存之旨十分吐露いたし候處凡そ異存無之与之事ニ候就中副一條ニ就ては再發不致樣談付置候方宜く与相考候付殊更ニ御尋問申度義も副之事ハ議長より屢大臣公に御申出相成候趣此内ゟ拜承いたし候右即今副御据無之候ては不都合之廉有之ては之事あるや或ハ同人之人物ヲ推尊して副へ御拔擢御相當与議官中之論ヲ以申立候事ニても有之哉斯く立入リテ御尋ニ及候次第ハ此内ゟ厚御談ニ及折角政府与元老院之氣脉貫通候樣ニ与心配致居今日之運ゟ相成然ルニ議長より御申立之事不被行候ては政府ニおひて相拒ミ候姿ニて甚氣遣候間若副を御据無之ては不相濟廉有之候ハヽ承知之上ハ又如何樣共盡力も可致趣意之段も申述候處同人勘考ニてハ殊更ニ次官御設無之ては差支与申事ハ萬無之必議長与幹事之職掌長官之次官ニ對スルカ如キ諸省之體裁与相異リ候付少々議長ニおひて御不安心之處ゟ一人次官ニ御据置被成度御趣意共ニてハ無之哉与相考候趣尤議官一同之申立与申樣なる次第ニてハ更ニ無之此事ハ外ニ柳原一人承知候迄ニて他ニ關リ知ルモノ一人も無之与之事ニ有之候然レハ大ニ安心致候次第若難差置情實も有之候ハヽ愚力ヲ盡シ度与存込候事ニ有之乍去副ヲ御据相成候ても御申立之人體ハ下官ニおひてい決て適當与ハ不存候段も無服臓与申入置候最早御内評御決定之事ニ候得ハ此上何も申上候事無之与申候付猶議長ハ勿論貴官ニおひても不滿足ハ無之哉与念を推し候處從前被相行候事柄をハ廢与申事候得ハ左も可有之候得共別段新ニ御申立有之候義

故御都合ニ依御採用無之旨申事候得ハ議長ニおひて決ゐ左樣之事被爲在
間舗又下官ニおひてい毛頭彼是無之与之事ニ候
同人進退之事ニ付ゐも十分論し候處是以斷念いたし候与之事ニ候就ゐハ
此上相願候義ハ法制局御用取扱之上ニ付一切之書類ハ凡ゐ副長よゑ撿印
之上長官ゟ差出ニ治定ニ候得共何分同局之事務意外ニ多端書類も輻輳候
得ハ悉ク經覽檢印之事ニゐハ元老院之事務有之微力ニ堪兼候次第ニ付今
後ハ長官ニおひて觸目之上此件ハ河野ゟ通覽爲致可然与申事柄ヲ時々熟
覽檢印いたし候樣有之候得ハ別ゐ幸ニ候尤過日一應伊藤長官ゟ遂示談候
得共其節ハ專ら辭退之方ヲ熱心いたし候折柄ニゐ遮ゐも不申入長官も對
したる返詞ニゐも無之今日辭退之事不已得當分通ニゐ盡力致候事ニ決心
候得ゟ右丈ケ之處ハ此上長官ゟ是非歎願致度与之事ニ候間夫ハ篤御相談
可然与申入置候
內情ニおひて困却之次第も可有之与相察候付隨分元老院ニ對しても御困
りの譯も可有之与申試候處實ハ其事や何だの不信用之姿も有之且兼ゐ議
長ゟ御申立之事不被相行も此ニ基セシト感觸も可有之哉与相察セらゑ候
故猶更辭退之意を決し候內情之段も申居候間官途ニ就キ候以上ハ左樣之
事ゟ普通之譯ナリ固より此節之事ハ貴官之造意ニ出候事ニも無之其原因
ハ政府上之大體ニ關し別ゐ重大ゐる事ニゐ決ゐ前後顧念ある位ニゐハ目
的ヲ達セラルヽモノニ無之候間斷然御決意一層之憤勵あらまゆ〳〵き旨申
入候處心底此ニ相決候上ゟ最早萬御氣遣被下ましく勿論一心上敢ゐ欺罔
もる處無之赤心ヲ貫キ候得ハ自ら明白いたし候与存候旨ニ候
右之顚末ニゐ候間大略之處御心得迄ニ申上置候今朝之模樣ニゐハ同
人ニおひてい決ゐ彼是ハ無之此上ハ意ヲ一ニ決して盡力可致与存候
畢竟一身之苦しき事情よゑ風与申出候事与想像被致候仍ゐ此上同人
歎願之趣ハ少々御寬恕有之候ゐも遁避之意ハ無之歟与愚考候猶御賢
慮可被下候也

三月廿一日　　利通

伊藤賢臺

猶々小子愈明日ゟ發足候付萬事宜ク御願申上候別ゑ御心配を懸甚御氣之毒ニ候得共不悪御汲量所仰候

【解説】是月五日元老院幹事河野敏鎌ハ法制局副長官ニ兼任セラレシモ種々ノ事情ヨリシテ職ヲ辭セントス既ニシテ元老院議長有栖川宮熾仁親王ハ從來久シク缺員ナリシ元老院副議長ヲ補任センコトヲ要請セシモ政府ニ於テハ俄カニ同意セス書中「三ゑ條御内評」トアルハ卽チ是レナリ依リテ利通ハ是日乃チ河野ニ面會シテ政府ノ内議ヲ告ケ猶ホ副議長問題ニ關シテハ兼テ政府ト元老院トノ折合ヲ顧慮セシ際ナレハ若シ政府其議ヲ容レサルニ於テハ兩者ノ間ニ確執ヲ生スヘキコトヲ懼レ特ニ設置ノ事情ニ付キ尋ネタリ河野ハ之レカ事情ヲ說明シ猶ホ法制局副長官トシテ執務上ノ希望ヲ述ヘ自己ノ立場ヲ訴ヘタルニ對シ利通ハ懇諭スルトコロアリ遂ニ河野モ諒トスルニ至レルヲ以テ法制局長官ヲ兼子タル伊藤ニ其ノ顚末ヲ報シタルナリ

一六四六　前島密への書翰 明治十一年三月廿一日　（前島男爵家藏）

【按】山形縣令上京ニ付キ示談スヘキコトヲ命シ猶ホ來邸ヲ求メタルモノナリ

兼ゑ山形縣令呼出置候付自ら當月中ニハ出京之筈与存候就ゑ彼裁判事件宜御談置有之度下官も來月十日まてニハ歸京之含ニ候其上猶可相談候此旨草々如此候也

三月廿一日　　利通

前島少輔殿

再伸甚御面倒之至ニ候得共御直談不致候ゟ不相叶事件有之候付御退出より一寸御入來相願候尤御用都合ニ依リ午後三時前ニゟも差支無之候也

【解説】山形縣令ハ三島通庸・管下裁判事件ニ付キ上京ヲ命シタルモ利通ハ廿二日熱海へ出發スヘキヲ以テ不在中縣令へ談合ヲ遂ケ置カレタキ旨ヲ通知シタルナリ

一六四七　税所篤への書翰 明治十一年三月廿一日（大久保家藏）

【按】税所堺縣令ノ病氣見舞ヲ兼テ上京ヲ促シタルモノナリ

敬呈彌御安康奉拜賀候陳ハ吉井ヘ來書傳讀候得ハ少々御發病之趣如何之御事ニ候哉此内ヨリ御出京之筈与相待居候御容體ニ依ゟ〻無致方候得共可相成此節會議ニハ御勉强有之度致希望候追々春花之好時節却ゟ御憤發御出縣之方一般之保養ニモ可相成与存候間是非御進め申上候人間ハ張出し候氣分ヲ失ヒ候ゟハ愈老ニ陷リ候外無之候乍去無理ヲ申譯ニモ無之候得共當地ハ良醫モ有之旁可然与存候貴兄之御病根一朝一夕ニアラス候故取シメテ此度ハ御根治有之樣致希望候小拙ニモ二週間之御暇許可ヲ得候間明日ヨリ熱海ゟ發足之筈久々振之樂ニ候餘は正五郎ヨリ御聞取可被下候此旨艸々拜具

三月廿一日夜　利通

税所雅兄

【解説】「此節會議」トアルハ地方官會議ノコトニテ政府ハ是月五日伊藤參議ヲ議長ニ任シ十五日地方官會議規則ヲ改正發表シ府知事縣令ハ四月一日ヲ以テ東京ニ參集スヘキ旨ヲ達セリ然ルニ當時堺縣令タリシ税所ハ書ヲ吉井友實ニ寄セ病氣ノ爲メ不參ノ旨ヲ報シ吉井ハ利通ニ其ノ書ヲ示セシカハ出京ヲ促シタルナリ正五郎ハ酒匂ニテ元利通ノ家來ナリ

一六四八　伊藤博文への書翰 明治十一年三月卅一日（伊藤公爵家蔵）

【按】熱海温泉ヨリ歸京ノ期ヲ報スルト共ニ地方官會議ニ附議スヘキ諸法案ニ言及シタルモノナリ

猶々下官ニも來月十日迄ニハ歸京仕候付其内宜御願申上候別紙乍憚御屆被下度奉願候也

拝啓追々春暖相催益御安固被成御坐奉敬賀候陳ゟ地方官も追々來集愈御繁務之筈奉察候會議案も最早御取調も相濟候半就ては猶内閣御評決相成可申下官ニも可成早目歸京之含ニハ候得共凡七日八日比よも相成可申候付何卒御待不被下樣奉願候最御局よて十分御講究之上内閣よて御治定有之候得ハ更ニ遺憾無御坐候固よ大體ニハ相變候義無之与存候萬一も近々歸京可致与御見合被下候も難圖爲念右御斷申上度如此御坐候草々百拜

三月三十一日　利通

伊藤賢臺下

再伸大坂知事渡邊ゟ書狀到來少々所勞よて此涯出京不相調趣申來候自ら御屆有之候筈与存候得共爲念申上置候

此節ハ以御蔭誠ニ難有入湯久々振快樂無限候也

【解説】當時法制局ニ於テ曩キニ利通カ建議セル地方制度ニ關スル諸法案ヲ審議中ナリシヲ以テ地方官會議ニ附議スル以前ニ之レヲ確定スルノ必要上萬一伊藤カ利通ノ歸京ヲ待ツカ如キコトアリテハ不可ナリトシ願慮ナク審議ヲ進行スヘキコトヲ述ヘ念ノ爲メ歸京ノ期日ヲ報シタルナリ書中「御局」ハ法制局ニシテ伊藤ハ長官ヲ兼任セルナリ再伸ノ渡邊ハ大坂府知事昇ニテ病氣ノ爲メ會議ニ不參ノ旨ヲ屆出テタルナリ

一六四九　金井之恭への書翰 明治十一年三月卅一日（金井四郎氏蔵）

【按】休暇期間タル二週間ノ屆出ニ付キ依頼シタルモノナリ

春暖相催愈以御安固被成御奉務奉賀候陳ハ下官御暇之義二週間御許可之處常例ハ如何可有之哉往來を除き二週間ニ而候得ハ差支無御坐候得共若往來込之二週間ニ候ハヽ乍御面倒往來込而之都合ニ御取計被下度御頼申上候來月四日迄ニハ歸京難仕候間大臣方へ宜御執成置給度候來月十日迄ニハ必罷歸可申と存候此旨草々拜具

三月三十一日　利通

金井殿

一六五〇　覺書　明治十一年三月　（大久保家藏）

地方會議期限ノ事
伊地知建言ノ事
湯治御暇日數
吉原へ廿一日吹聽云々　ヒットマン・リセンドルノ事
延遼館ノ事
精養軒ノ事
内藤新宿見分ノ事
德大寺ゟ侍從ノ事
○
東京府朱引内郡長ノ事
内國債云々ノ事
楠元病院云々ノ事
蠶卵紙云々ノ事
琉球行船ノ事
郡長職制ノ事
八十圓ヨリ多カラヌ云々ノ事

小學校資金　勸業資金

川崎祐名ノ事

司法卿ゟ千葉縣訴訟　大審院

一六五一　岩倉公への書翰 明治十一年四月三日　（愛甲家遠氏藏）

【按】大隈邸ニ臨幸アラセラルヘキコトニ關シテ熱海ヨリ書中進言シタルモノナリ

謹啓益御安康被爲在御坐奉敬賀候陳ゟ本日伊藤參議ヨリ一封到來書中ニ近日上野公園へ行幸被爲在還御懸大隈參議邸へ臨マセラレ候御内定之由就右同人勘考之趣詳細申來大體之論ヲ以大臣方ヘモ異議申上置候旨ニ候下官ニ於テモ同人之考慮至極尤ニ同意仕候抑天皇之臣下之邸ヘ臨マセラレ候事ハ古今未曾有之義ニゟ非常之恩遇ニゟ臣下タルモノハ人心無上之寵榮ト奉感佩候次第ニ候得ゟ若シ輕易ニ流レ候時ハ乍恐玉輦之尊キヲ忘レ候奚ヲ生候半歟固ヨリ聖慮ニ被爲出候御事ニ候得ハ敢ゟ一言可奉申出義ニ無御坐候得共大臣方之御旨趣ハ何レニ可被爲在哉大隈ヘ臨マセラレ候上ハ寺島大木伊藤山縣邸ヘハ是非同樣ニ寵榮ヲ賜候樣無御坐候ゟゟ甚以不公平之譯ニ相當リ各々滿足仕候義ニハ有之マシクト奉存候乍去人臣之邸ヘ臨マセラレ候事ハ全ク御遊興之御旨趣ト申事候得ハ何ヲカ論可申哉下官則臨御之榮ヲ蒙リ候ゟ餘人ヲ拒ミ候樣ニ相當リ一心ニ安ンシ不申候得共不曾讓劣寸功モ無之事ナカラ復古之際ニ僥倖シ候譯ヲ以分外ノ榮ヲ拜賜候事ト奉存候間敢ゟ不憚忌諱申上候且又如前條不容易

御大事之義伊藤ナトヘ御示談之上御治定可被爲在義ニハ無御坐候ヤ下官ニオヒテモ大臣方之御旨趣伺得不申候此旨態ト恐言仕候拜首多罪

四月三日夜　　利通

岩倉公閣下

再伸匆卒ニ相シタヽメ麁筆御高免奉仰候也

【解説】岩倉公ハ重臣御優遇ノ意味ヲ以テ聖上ノ上野公園ニ行幸アラセラルヽヲ機トシ還幸ノ際大隈參議邸ニ臨幸ヲ仰カントシ三條公ノ同意ヲ得テ内奏セリ然ルニ伊藤參議ハ之レヲ不可トシテ兩公ニ進言スルト共ニ書ヲ利通ニ寄セ之レヲ告ケシニ利通亦同感ナルヲ以テ直チニ書ヲ岩倉公ニ贈リ意見ヲ述ヘタルナリ公ハ伊藤及ヒ利通ノ意見ヲ聞キ深ク自己ノ輕舉ヲ悔ユルモ既ニ内奏ヲ經テ御沙汰ヲ給ハリシモノナルヲ以テ還幸ノ途次暫時御立寄ノ形式ニ依リ庭前ノ櫻花御一覽ノ上直チニ還御アラセラルヽコトニ決セシコト次ニテ知ルヘシ

【參考】其一　三條公より岩倉公への書翰明治十一年四月朔日　（大久保家藏）

過刻御廻壹紙返上仕候會館賣拂之儀御懸念御尤ニ存候恩賜之邸ヲ他ニ讓リ候ヘ如何ニ候得共保存之目的も難相立候得ヘ之ヲ讓リ新ニ會館ヲ建築スルの趣意故子細ハ有之間布愚考仕候

侍從試補之儀ハ烏丸西四辻之内可然存候

大隈邸臨御云々如何之論ニ歟不存候得共既ニ本日御沙汰ニ相成候上ニ付今更御止相成候ヘ本人之面目よも關し甚心痛仕候小生も別ニ心付不申御同意致候事ニ候彼是一應御配慮有之度自然も御止ニ成候ハヽ少時ニヘも早く御掛合無之ヘ別て不都合ニ可至与當惑仕候此段早々如此候也

四月一日　　實美

巖倉殿

二伸時機之當時ニゐ不可然他日被爲在候義ニ候ハヽ宜ク候得候共
全御止ニ相成候事ハ實ニ大隈氏ニ對し氣毒而已ニ無之与存候

【參考】其二岩倉公より大久保への書翰（明治十一年四月四日　大久保家藏）

聖上兩后宮益以ゐ御安寧恭悅此事ニ候貴卿ニも彌御安全御滯在湯
治定ゐ適セラレ殊ニ春暖之候一段御保養相成候事ト令欣賀候府下
其外至ゐ平穩御放念有之度候

一地方官追々出京何レも欣々タル模樣ニテ各縣下凡ゐ靜謐次第ニ民
力ヲ得候勢ノ由實ニ慶賀可致事ニ候就ゐ之此機ニ投シ兼テ御内評
ノ國債ヲ募リ内政着手ノ事緊要勿論ノ義ニ候華族輩ノ處ハ深く說
諭十分之盡力心得ニ候柏村海江田等急渡振ハマリ配慮ノ筈只海江
田ノ處如何ト存候貴卿御歸京之上ハ地方官之處只管御配慮之事と
存候

一來十日地方官會議開議ニ被決候貴卿御歸京之上カト存候處伊藤へ
御文通之趣有之御見合不申旨ニ候十日後御發途之趣御心得迄ニ一
筆申入候

一條公ヨリ山縣へ内意彼數輩昇級之件未タ返答無之候得共先六ヶ敷
樣子ニ被存候

一黑田三木妻終ニ養生不相叶去月廿八日死去何共氣毒之事ニ候

一會館建屋も外務省跡御用ニ御買上ヶ相成候事ニ内決候且地方官會
議御用濟之上ハ當分元老院之處會館ニ相借心得ニ候

一北越御巡幸新聞紙ニテ承知羽州人民昨年行懸リヲ申立頻リニ同國
御巡幸願立候趣御歸京ノ上ハ定ゐ切迫願出候事カト推察候隨分一
理ハ可有之存候事ニ候

一來ル八日上野櫻花　叡覽としゐ行幸同處御畫ニゐ御歸路大隈亭ゟ
御立寄御内意候此義ニ付ゐハ時機未タ早シ不可然云々伊藤心附有
之尤ノ事ニ存候得共既ニ御内意有之候上之事ニテ致し方も無之頗

ル心配致し誠ハ暫時御立寄庭前櫻花御覽と申事ニ相成候此件ハ全ク小生輕易取計候事ニゟ深く恐縮尚子細ハ面上萬々可申述候得共御含置被下度一筆如此候

一來ル六日外山學校ニ於テ練兵　天覽被仰出外國公使も被爲召候事ニ候

一北白川宮御進退漸ク落着御斷相立前文練兵ノ砌御出仕之筈ニ候

一井上故石見云々ノ件大隈考慮幸適當之例有之候ニ付此比取調出來ノ筈ニ候

一高杉老父之事ハ御歸京之上更ニ可及御相談事と存候杉大輔歸京無之ゟハ難分候事之

一來ル九日上野花滿開之旨久々ニゟ各國公使夫妻及ヒ内閣員同所ゟ招請專ラ馬車ニテ馬車道廻行ヲ主トシ食事ハ眞ノ辨當位ノ積リ車道遊行ハ外國人好事ノ由寺島心附ニ候

右之條々態々可及御文通程之廉無之候得共定ゟ御徒然と存候ニ付雜事混交筆ニ任セ陳列候早々以上

四月四日　　具視

大久保殿

必々不勞貴答只々御歸東御待申上候也

【參考】其三岩倉公より大久保への書翰（明治十一年四月四日）（大久保家藏）

三日夜御認御書四日午後八時三十分着正ニ令披見候扨ハ近日上野公園行幸被爲在　還御懸大隈邸　臨御之事伊藤ヨリ文通ニ付態々飛脚仕立ラレ御旨趣懇々御申越何も令承知候抑此事タルヤ敢ゟ他人ノ預リ知處ニ無之全ク小生壹人ノ輕卒ニ起リ候而已始終申條も無之事ニ候素リ當人ヨリ一言ノ内願も無之亦三條ゟハ小生ヨリ心付申談候譯ニゟ參議邸ゟハ次第ニ追々　臨御可然事ト申入其上聖上ゟ小生願出候事ニゟ則御内意相成候上伊藤ゟ心附承リ段々尤ニ

存候ニ付ゐゑ實ニ恐縮進退極リ候次第早速三條ゐ文通ノ處別紙返答書ニ付伊藤方ゐ行向心附尤ニ存候上ハ斷然御止可然候得共既ニ昨日御内意ノ今日條公書狀も如此候併シ是非御止メノ方カ又内閣ノ御相伴抔ハ一切御止メ眞ニ鳥渡御立寄計ニゐ庭中櫻花御一覽直ニ　還幸カ如何可致哉及懇談候處御内意ノ上ハ致シ方も無之暫時御立寄ゟ外ナシトノ事ニテ更ニ大隈ゐ云々ノ御都合ニ付眞ノ御立寄計と申入候事ニ候(云々ト申子細ハ書取難ク面上ノ砌可申入候)然ルニ只今貴翰一見恐縮ハ無論眞ニ進退極リ苦心此事ニ候得共一分ニゐ御返答難申入尚明早朝三條示談深く心配可致候飛脚爲待置一筆如此候早々以上

四月四日　　具　視

大久保殿

尚々今朝一書及御文通候事ニ候本文ノ件ハ吳々小子一分ノ不束ニテ千萬苦慮致し候次第難盡紙上事ニ候小子ハ最早内閣丈ゐハ臨御ニテ宜敷事と卒爾ニ心得居候仕合實ニ御補佐申上候筋ヲ誤リ候事ニテ面目無之事ニ候以上

【參考】其四　岩倉公より大久保への書翰　明治十一年四月七日　（大久保家藏）

一早速御答書忝候彌御安寧本日午後五時御歸京之旨欣賀之至ニ候明日迄ハ御參朝無之趣且又條公ゐ之御傳言何も承知致候扨過ル三日來翰四日着爾來種々心配仕候處一度被　仰出候上ハ故ナク御延引如何ニも御不都合ニ被　思召候由其上新聞紙上云々顯然旁前議之通りとの御沙汰ニ候就ゐ云々御考慮之次第も被爲在百方内願候得共不被行實ニ小生ノ不束ト無論職掌ヲ誤リ候次第恐縮千萬面目も無之事ニ候右今朝決定ニ付伊藤ゐも行ゐ成行申聞其上一通認メ矢張明八日　臨一時云々申入候事ニ候得共飛脚行違候義と存候尚萬々面上可申入候早々以上

四月七日　　具　視

大久保殿

一六五二　三條公への願書 明治十一年四月四日　（内閣公文録）

【按】熱海ヨリ賜暇ノ追加ヲ願出テタルモノナリ

私儀三月二十二日より二週間之御暇ヲ以テ熱海浴治罷在候處往還之日數ヲ除キ右二週間御暇賜リ候樣致度此段奉追願候也

十一年四月四日　　参議大久保利通

太政大臣三條實美殿

一六五三　伊藤博文への書翰 明治十一年四月八日　（伊藤公爵家蔵）

【按】地方官會議案ノ廻送ヲ受ケシニ對シ答ヘタルモノナリ

益御壯固奉敬賀候陳ハ下官よも昨日午後歸京仕候此内ハ細々之御答書被下於熱海正ニ落手地方官會議案御取調出來候由ニ付一冊御廻被下拜讀仕候別紙御骨折有之とゝ存と簡明ニ相成何も異存無御坐候則拜接旁相伺度候得共本日まてい不參仕候故不取敢拜酬如此御坐候餘明日拜表ニ讓草々拜具

四月八日　　利通

伊藤賢臺下

【解説】是ヨリ先キ伊藤ハ地方官會議ノ議案完成セシヲ以テ之レヲ熱海ニ送リ利通ノ閲覽ヲ乞ヒシカハ七日歸京スルヤ何等異存ナキ旨ヲ答ヘタルナリ

一六五四　金井之恭への書翰 明治十一年四月八日　（金井四郎氏蔵）

【按】歸京ヲ報スルト共ニ不參屆出ノ手續ヲ依頼シタルモノナリ

愈御壯固奉賀候陳ハ下官ニも昨日午後歸京仕候得共本日迄ハ不參候故彼

是御屆ノ日可然御執計被下候樣乍御面倒御頼申上候此内ハ御暇之義ニ付御手數相成早速御書面を以御示し被下御禮申上候此節ゟ久々振快樂之人浴ニゟ別ゟ之保養相成仕合之至ニ候何も面上ニ讓リ草々如此ニ候也

四月八日　　利通

金井老臺

一六五五　三條公への屆書 明治十一年四月八日（内閣公文錄）

【按】熱海ヨリ歸京ノ旨ヲ屆出タルモノナリ

私儀先般賜暇熱海ヘ罷越候處昨七日歸京仕候此段御屆申上候也

明治十一年四月八日　　參議大久保利通

太政大臣三條實美殿

【解說】利通ハ賜暇ヲ得テ前月廿二日東京ヲ出發シ途中小田原ニ一泊廿三日熱海着浴遊十六日ニ及フ而シテ十日迄滯在ノ豫定ナリシモ政務ノ都合ニテ期日ヲ早メ歸京シタルナリ

一六五六　中井弘への書翰 明治十一年四月九日（京都博物館藏）

【按】歸京ヲ報シ來邸ヲ求メタルモノナリ

愈御安固奉賀候陳ゟ下官ニモ一昨日歸京久々振珍聞奇談承度候付御差支モ無之候ハヽ御入來御待申上候此旨早々拜具

四月九日　　利通

中井雅丈

一六五七　三條公への屆書 明治十一年四月十一日（内閣公文錄）

【按】熱海ヨリ歸京ニ付キ出仕ノ旨ヲ屆出テタルモノナリ

拙者儀願濟熱海溫泉ヘ罷越候處歸京候ニ付本日ヨリ省務取扱候此段及御屆候也

明治十一年四月十一日　　内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

一六五八　伊藤博文への書翰 明治十一年四月廿四日（伊藤公爵家藏）

【按】地方官會議第三號議事ノ期日ヲ問合セタルモノナリ

益御安祥奉賀候陳ハ第三號議事ハ明日ゟ相始リ候趣承候愈其通ニ候哉一寸相伺候也

四月廿四日　　利通

伊藤殿

【解說】地方官會議ハ是月六日ヨリ開會セラレ議長ハ伊藤參議幹事ハ東京府知事楠本正隆・內務大書記官松田道之・愛知縣令安場保和ナリ十日開院式ヲ擧ケ聖上臨御勅語ヲ賜フ斯クテ翌十一日ヨリ第一號議案卽チ郡區町村編制法ヲ審議シ十四日ヨリ第二號議案タル府縣會規則ヲ議シ更ニ二十五日ヨリ第三號議案タル地方稅規則ヲ議スルコトヽナレルナリ按スルニ利通ハ內務卿就任以來內治外交徒ラニ多忙ニシテ其ノ經綸ヲ實行スルコトヲ得サリシカ西南役ノ鎭定ニ依リ愈多年ノ抱負ヲ實現セントシ十一年ノ第二回地方官會議ニハ殊ニ囑目シタル如ク大書記官松田道之ハ利通ノ意ヲ承ケ各地方官ニ對シ地方行政ノ改良案ヲ詳細ニ訓示スルアリキ猶ホ利通カ本會議ニ對スル態度ハ次ノ前島密ノ談話ヲ徵スヘク又佐々木高行カ其ノ日記十一年四月十日ノ條ニ「木戸孝允物故シ板垣退助モ辭シタルニソ伊藤博文ハ地方官會議ノ中止ヲ主張セルニ大久保利通ハ一度開議シ今日故無ク中止不可然トノ論ニテ開會セリトソ岩倉公ヨリ密ニ聞ク」トアルニテ知ルヘシ

【參考】男爵前島密談話「夢平閑話」抄

明治十一年の春初なりき一日余は内務省に在りて執務す公は太政官に登閣し還り余に語りて曰く「今日太政官にて伊藤參議は地方官會議を廢止し之に代ふるに内務省中に地方官諮問會を開きては如何と發議せり余（大久保）は此議に同意せさりき何となれは地方官會議は其性質固より立法の府に非す一個行政上の諮問會に相違なく且其の議員たる者も既に民選の者に非す其の形式に於ては一種奇異の物たるを免れす成程理を以て之を論すれは誠に伊藤の發議に同意すへき筈なるへし否其の發議をも待たさる事なり然りと雖も當初此の會議を開きたる精神如何を顧みれは其の變則なるを知りつゝも他日國會開設の事あらん其の初歩起頭を作すに在るを見るへし故に何となく其の議員は各其の府縣地方を代表せしむるの意を含ませ其の位置は元老院に對して下院とも謂ふへき意を寓したる也直言すれは是れ異物なりと知りつゝ代議院の雛兒を作れる也言ふ迄もなく此の國柄を一變し立憲代議の制度を確立せさるへからすされは其の進歩の途上異物變則の奇觀を生するも今日の道行に免かるへからす其の事情既に免る能はされは別に怪むにも足らす又愧つるにも及はす唯却て其の變態異物の形式を惡みて其の精神を滅沒せしむるを恐るゝのみ故に予は寧ろ變態異物の形式に就き之を正して立憲の精神を發揮するの術を考究せんと欲す乃ち予は暫く地方會議を存續し以て國會の形式を求め開設の時機を促さむことを希望す足下以て如何と爲す」と

余は更に之に對して所見を陳へ併せて府縣會の事を述ふ公聽きて領き余に囑し公の意見と余の所見とを合し草按を立てしむ余は日なら す一篇の按を呈す書中に云者卽ち是なり公此に於てか又曰ふ「予は斷して本年の地方官會議を開くへし復踟躕すへきに非す」と其の年會議は召集せられ開會の後二日にして公兇刃に罹りて斃る

一六五九　前島密への書翰 明治十一年四月廿四日　（前島男爵家蔵）

【按】岩倉公ヨリ廻送セラレシ華族ヘノ内諭案ヲ送附シタルモノナリ

昨日御談申置候巖倉殿よゟ同族ゟ内諭之案別紙御廻被下候間御一覧之上千坂ゟ御下付有之度此旨草々如此候也

四月廿四日　利通

前島殿

【解説】「内諭之案」トハ起業公債發行ニ關シ華族ノ應募ヲ勸誘スルノ草稿ニシテ實記掲載ノモノヲ見ルニ次ノ如シ

【参考】起業公債證書發行ニ付具視衆華族ヲ勸誘スル事　（岩倉公實記抄）

今回我カ政府新ニ内國債ヲ起シ以テ大ニ國家ノ便益ヲ興サントス其事ハ則チ京坂間ノ鐵道線ヲ延ヘ大津ヲ經テ敦賀港ニ達セシメ新潟石ノ卷等ノ諸港ヲ疏鑿修繕シ併テ各地要用ノ陸路ヲ開通シ若クハ坂道ヲ削平シ以テ往來運輸ノ便ヲ開キ又羽州ノ鑛山北海道ノ炭坑等ヲ開鑿改良シ及ヒ奥總ノ諸曠野ヲ開墾シ牧蓄其他農事ヲ興起奬勵シ以テ或ハ天賦ノ利源ヲ疏導シ或ハ殖産就業ノ基ヲ立ツル等是ナリ

予是ニ於テ我同列華族諸君ニ告クル所アリ我カ國土ノ物力未タ盛大ニ至ラス我同胞ナル士民ハ未タ生息ノ道ヲ得ス而テ我儕幸ニ聖明ノ隆恩ニ浴シ祖先ノ遺業ニ藉リ美ヲ衣テ甘ヲ食フヲ得タリ是縱令國家經綸ノ遠略ニ干預セサルモ豈ニ獨リ吾人子孫ノ禍福ハ專ラ國家ノ盛衰ト士民ノ安危トニ係ル所以ヲ思ハサルヘケンヤ況ヤ身士民ノ上ニ位シ待遇ノ異ナル責任ノ重キ實ニ我カ國家ト休戚ヲ共ニスルノ地ニ居ルニ於テオヤ我儕此國歩艱難ノ時ニ際會セリト雖又幸ニシテ此有爲ノ好機會ニ遭遇ス顧フニ當サニ同心一致シ各自應分ノ助力ヲ爲シ以テ國家ノ盛業ヲ賛成ス可キノ時ナリ諸君ニシテ果シテ資力ヲ傾ケ募集ニ當ラハ之ヲ大ニシテハ國益ヲ補助シ上朝廷ノ誠意ニ答ヘ之ヲ

小ニシテハ諸君ノ曾テ臣子視スル所ノ士民ヲシテ無限ノ幸福ヲ得セシメ其他諸君一家ノ計ニ於テモ亦自ラ一種堅固ノ儲存法ヲ生シ我カ國家ト共ニ其利益ヲ增殖シ子々孫々永ク其慶ニ賴ルヲ得ン切ニ望ムラクハ我カ同列諸君ノ深ク意ヲ此贅言ニ加ヘンコトヲ

明治十一年五月　　督部長岩倉具視

一六六〇　岩倉公への書翰 明治十一年四月廿六日　（櫟原新輔氏藏）

【按】内國債募集ノコト并ニ皇太后宮製絲所行啓ニ付キ答書シタルモノナリ

尙々本文返上書相達不申候ハヽ、猶御沙汰可被下候

拜讀仕候陳ハ内國債云々之義承知仕候華族ゟ之說諭書過刻返上候付最早御落手被下候事与奉存候皇太宮製糸所行啓之事も承知仕候内藤新宿之義与奉存候間則其筋へ申聞都合宜キ時分申上候樣可仕候此旨拜答草々拜首

利通

四月廿六日

岩倉殿

【參考】岩倉公より大久保への書翰 明治十一年四月廿六日　（大久保家藏）

先時兩度來簡忝存候

一華族說諭書御返却慥ニ落手致候

一太宮製絲所行啓之義内藤新宿よてハ無之右ハ先達而同處ゟ　行啓之節貴卿小生供奉ニテ他日富岡製絲所カ屑絲製造所カ兩樣之中御覽之樣申上候事ニ候定メテ屑絲ノ方カト存候勿論必ス御所望と申譯ニも無之尙明日御面會可及御相談候

一明朝ハ無據義有之令不參候獨逸公使離盃延遼館午食ニハ出頭候貴卿ニも御同席と奉存候其節萬可申入候

右條々必不及御答愚孫代筆御斷申入候也

具視

四月廿六日

大久保殿

一六六一　本田親雄への書翰 明治十一年四月廿八日　（本田男爵家藏）

【按】鹿兒島縣へ義捐ノ爲メ有志ノ醵金取纒メ方ニ關シ來邸ヲ乞ヒタルモノナリ

益御安固奉敬賀候陳ハ鹿兒島縣へ同志出金取纒め方之義ニ付吉井ゟ御談之趣承候付猶御直談申上度義有之候間乍御面倒明日午後御退出よゞ弊宅ゟ一寸御立寄被下候樣相願候此旨草々如此候也

四月廿八日　利通

本田賢臺下

【解說】「鹿兒島縣へ同志出金」云々トハ當時兵亂ニヨリテ疲弊セル縣下救濟ノ爲メ且ツハ敎育勸業費ニ充テントシテ義捐金ヲ募集セシカハ之レカ纒メ送金方ニ關シ談合セシモノニテ本田ハ時ニ太政官大書記官タリキ

一六六二　本田親雄への書翰 明治十一年四月廿九日　（本田男爵家藏）

【按】來邸ヲ求メタルモ少シク歸宅ノ遲刻センコトヲ通シタルモノナリ

本日午後御退出よゞ御入來相願置候處難差置義有之少々遲刻相成候間左樣御承知被下度乍去遲クテモ三時半ニハ歸宅可仕候此旨草々拜具

四月廿九日　利通

本田賢臺

一六六三　岩倉公への書翰 明治十一年四月卅日　（岩倉家文書）

【按】地方官會議閉會ニ付キ各地方官ヘ御陪食ヲ賜ハルヘク意見ヲ具申シタルモノナリ

本日退出懸伊藤議長入來會議も都合能相纏ひ明日迄ゟて結了相成候付來ル三日閉院式被爲行度申立候由ニ承候就ては兼ては議員に　謁見幷會食之事も申上候處前條都合ニ候得ハ閉院卽日ニ午食或ハ晩食賜リ候得ハ御手數も相省キ彼是可然歟与存候付其旨伊藤に談試候處左樣御運相付候へハ無此上最御場所ハ　皇居之芝離宮之御都合次第ニては宜ク候得共　皇居ニ候得ハ　御陪食不被仰付候ては工合宜ク有之ましく勿論御陪食被仰付候ても鄭重ニ過キ不當与申譯ゟハ有之ましく地方官ニ於テハ殊更感戴可仕与申事ニ候間何ゟ明日參朝之上大臣方へ御談申上御内慮御伺御都合ニては御裁決ヲ仰クヘクト申置候次第ニ御坐候同人退散後猶又勘考候得ハ幸三日ハ金曜日ニ相當候間午食之晩食之何ゟとも御陪食被仰付候樣有之候ハハ十分之御事与奉存候乍去過日來少々御異例且本日ゟ御風邪氣ニては御風呂且御外出御見合之事を侍醫ゟ御願申上タル趣ハ形行御咄時宜ニ依テハ御許可不相成も難圖与之次第ハ申入置候若被　仰付候事ニ相成候得ハ地方官會議御用掛も奏任ハ同樣被成下度与申居候人員ハ七八名ニ相成候由ニ御坐候

御陪食之有無ハ且ク置キ會食ニ相成候ては同日ニ御運相成候方大ニ可然与奉存來ル三日ニ候得ハ餘日も無之宮内省心積りも有之可申候間一應以寸楮形行申上候付宜御勘考可被成下候何ゟ委細ハ明日御直ニ可相伺候草々敬白

四月卅日　　利通

岩倉公

【解說】利通ハ召集中ノ地方官ニ對シ拜謁幷ニ御陪食ヲ賜ハランコトヲ内願セシカ是日伊藤議長來訪シテ愈五月一日ヲ以テ會議終了スヘキカ故ニ三日閉院式ヲ行ハレ度キ旨ヲ上申セシ旨語ルアリ依リテ重ネテ閉院式當日拜謁幷ニ御陪食ヲ賜ハランコトヲ具陳シ猶ホ萬一聖上御不例ノ折柄賜餞ニ止ムルニシ

テモ當日行ハルヽコトノ可ナルヘキ旨ヲ述ヘタルナリ斯クテ豫定ノ如ク閉院式ハ三日行ハセラレタルカ聖上御不豫ノ故ヲ以テ有栖川熾仁親王御名代トシテ臨御遊ハサレタリ

一六六四　岩倉公への書翰 明治十一年五月三日

【按】内務省上申書活版ノコト及ヒ楠本ヨリ宮内省へ提出ノ書面ニ付キ答書シタルモノナリ

尚々過日御預申上候別紙返上仕候

昨日ハ度々御書被下御請も不申上失敬之至ニ御坐候内務省上申書活版云々之事ハ猶御直ニ可申上候且又宮内卿ゟ之一書一覧之上返上仕候兼而御廻有之候別紙一應楠元ゟ内見爲致濟御示之通他ニ差響無之哉否相尋候處決而差支之義無御坐重疊之御深旨別而難有旨申出候仍而別紙ハ則返上可仕之處兩日ハ行違ニ而延引仕候内楠元少々早まり候而別紙差出候事与相察候乍去御趣意ニ背キ候事ニ無御坐候間宮内卿ゟ之一書ハ下官迄御遣被下候得ハ假令前後はさ〳〵候而も後證ニ備申度候付其段御通知被下候樣奉願候此旨拜答旁草々如此御坐候餘今日拜謁ニ讓候拜具

五月三日　　利通

岩倉殿

【解説】「内務省上申書」ハ殖産及授産ニ關スル伺書ニシテ印刷ニ附シ内國債募集ノ參考上配付セントシタルナリ猶ホ利通ハ是日地方官ノ出京ヲ好機トシ大隈大藏卿ト共ニ地方官ヲ濱離宮ニ招キ殖産ノ奬勵華士族授産ノ方法及ヒ其ノ經費トシテ内國公債ヲ募集スルノ趣旨ヲ訓示セリ又楠本東京府知事ヨリ提出セシ書面ノ内容不明ナレモ文意ニ依レハ雲州邸御買上ニ關シ別紙内意書ヲ利通ニ廻送セラレ利通之ヲ楠本ニ内示スルトコロアリ然モソレ以前ニ於テ楠本ヨリ直接宮内省ニ願書ヲ提出

セシヲ以テ其ノ間ノ事情ヲ述ヘタルモノナランカ

【參考】岩倉公より大久保への書翰 明治十一年五月二日　（大久保家藏）

今日於會館内國債募集之事衆華族ゟ及示談候付大藏省ヨリ活版ニテ相廻リ候書類中昨日迄約束ニ無之去ル三日大藏卿上申書活版中ニ有之候右ニ而候得ゟ内務省上申書モ同樣可相成事哉同樣活版ニ被成候ハヽ速ニ五百五十部御廻シ被下度舊藩華族ハ元ト臣視スル士族輩ニ關係モ不少候條此段御依頼申度一筆如此候早々以上

五月二日　具視

大久保殿

具申候書類先時御廻シ申置候外德大寺書狀入御一覽候也

一六六五　五代友厚への書翰 明治十一年五月十一日　（大久保家藏）

【按】圍碁戰ニ勸誘シタルモノナリ

彌御堅勝奉拜賀候ゟ而ゟ明日ゟ愈御發途相成候哉若御立ニ候ハヽ是非今日ゟ名殘ゟ御一戰ゟ〳〵度定而御用多ニハ可有之候得共狐亭ゟ御出陣被下度小子ニハ十字ゟ參居可申屹与御延期無之樣願上候尤接戰ゟ上勝敗相分ゟ候ハヽ神速御繰上ケ被成候而よろしく此旨艸々奉得貴意候也

五月十一日　甲東

松陰主人

猶々此品持參ゟ〳〵候まゝ御笑覽ニ備候御叱留被下候得ハ幸甚

【解說】利通カ公餘無上ノ快事トセシ五代トノ圍碁モ遂ニ「名殘ゟ御一戰」ト云ヘルコト實際トナリ此日カ最後ノ對局トナリシハ奇ト謂フヘシ狐亭ハ三十間堀河畔ニ在リシ旗亭「繰上ケ」ハ五代歸坂ノコトナリ

一六六六　伊藤博文への書翰 明治十一年五月十二日　（伊藤公爵家藏）

【按】地方官昇級ノ件ニ付キ明朝面談ノ都合ヲ問合セタルモノナリ

益御清康奉欣賀候陳ハ明朝御差支無御坐候ハヽ七時比參上仕度此内粗御談申上候地方官昇級等之事ニ付猶又御直談申上度候此旨一應御都合可相伺草々拜白

五月十二日　利通

伊藤殿

一六六七　岩倉公への書翰（明治十一年五月十三日）（山田直矢氏藏）

【按】山形秋田兩縣民ヨリ御巡幸ノ議ヲ嘆願シ來レルヲ以テ明朝拜趨ノ都合ヲ問合セタルモノナリ

山形縣秋田縣人民より御巡行嘆願之一條御奏上之御都合相伺度存候處今日ハ風与失念仕候より何卒明日中參上御伺申上度奉存候明朝八時より太政官へ出頭之約束モ有之候付七時頃拜趨仕候ゆも可然哉御出立前御都合も可有之候付一寸以楮上御伺申上候草々拜白

五月十三日　利通

岩倉公

【解説】當時北陸御巡幸ノ議アリシヲ以テ山形・秋田兩縣民ヨリモ御巡幸ヲ仰キ度キ旨ヲ嘆願スルアリ依リテ公ノ奏上ノ都合ヲ拜伺セントシテ問合セタルモノニテ書中「御出立前」云々トアルハ公ハ有馬温泉ヘ出發ノ豫定ナリシナリ本書ハ岩倉公ニ宛テタル書ノ絶筆ナリシヲ以テ公ハ之レヲ表裝シ重野安繹ニ囑シテ跋文ヲ書セシメ利通ノ忌日毎ニ庄上ニ掲ケ僚友舊知相會シ追悼ノ意ヲ表セラレシト云フ

【參考】岩倉公大久保利通絶筆書翰跋（明治十一年八月）

嗚呼是贈右府大久保君遭害前一日所贈也、君將以明朝過予、予適有事辭

之、設使其來過、則免害亦不可知、書中所期、與其遭害之時同、若差跬歩、或可以免也命也、悲哉、予之與君相契最久、予蒙譴屏居北山、禁錮纂嚴、雖親姻毋通、君乃伺隙投問、潛來相見、予亦托辭展墓時出面之、所共議皆國家大事、秘籌密算外間無知者、以至丁卯革政、所謂出萬死得一生者、回想往事、使人病悸、嗣後同立于朝、協謀共事、十餘年于此、以予之無似、竊重位辱大任、而獲免罪戾者雖由

聖天子恩遇之優、抑亦君之扶翼居多、誼爲僚友、情均骨肉、卷舒遺墨、泫然泣下、此書爲羽州士民乞巡幸事而作、卽君職任所存、其惓々奉上愛民之概、亦可想見、且予與君、往復書牘、多至千百、此爲其絶筆、故爲裝潢藏、于家每祭日奠拜、以代其肖像、書中曰出行前者、時予乞暇浴有馬溫泉、上途有日故云、嗚呼君而猶在、予輩雖歲時浴遊、悠然度日可也、今則已矣

明治十一年八月　岩倉具視撰印印

重野安繹書印印

一六六八　伊藤博文への書翰　明治十一年五月十四日　（伊藤公爵家藏）

【按】內務省所管事務評議ノ爲メ參朝ヲ促シタルモノナリ

昨日御約束申上置候通大隈ゟも同時より參內之約束致置候付御多忙与存候得共暫時御參朝被下候樣奉願候此旨爲念草々拜白

五月十四日　利通

伊藤殿

【解說】是日利通ハ太政官ニ於テ地方官ノ進退、府縣ノ廢合等內務省所管ノ重要問題ヲ議定セントシ伊藤・大隈等ニ參朝ヲ告ケタルモノニシテ實ニ遭難三十分前ニ認メ眞ノ絶筆トナレリ猶ホ次ノ談話ニヨリ當時ノ事情ヲ知ルヘシ

【參考】公爵伊藤博文談話「大久保公絶筆の書翰に就て」

大久保公が紀尾井坂にて刺客の難に逢つたのは詰り西郷の復讐だ十年の戰爭の時西郷に黨した徒が彼の忠臣を殺したと云ふ迷想から來

たので固より大久保公もアンナ事があろうとは思つて居らなかつた遭難の日は明治十一年五月十四日のことぢや我輩は十年の戰爭が終つて當時初めて開く所の地方官會議の議長と爲つた段々是から地方制度も改良して行かうと云ふ時で府縣會なども彼の時であつたろうと思ふソコテ地方官を召集して會議を開いた其時大久保公は地方官を淘汰しなければならぬと云ふ考を持たれた此時分は松田道之(後東京府知事)なとが働いて居つたが地方官を淘汰しなければいかぬ老朽不能はいかぬと云ひ小縣を廢して大きな縣に合體させ樣と云ふ議も起つて大久保公の言はれるに私の方でも地方官の人物を調べて見やうが君の方でも君は實際會議の職掌に當つて居るし人物も能く分かつて居るだろうから其の意見を持出して呉れと云ふ譯で會議が濟んでから地方官の更迭に付て評議が起つた大久保公は自ら重く執つて盲目判を捺す樣なことは容易にされなかつたソコデ十三日の日に公は我輩の板坂の邸に遣つて來られて地方官の事も未だ悉く決斷して居らぬから君も忙しかろうけれども明日の評議には是非出て呉れ君が出て呉れなければ困まると態々來られたソコテ我輩は宜しい出ませうと云つて別れたスルト翌朝佐々木高行高崎正風の二人が遣つて來て當時君側に在る侍補の事に付て侍補だけては君德の培養が不十分であるからトウゾ大久保公に宮內省の方も兼ねて君側の方にも盡力する樣に働いて呉れんかと云ふ話をして居る中に大久保公から手紙が來た今から私は直く參朝するから君も直ぐに來て下さいと云ふ文意である何でも暗殺される十數分前に書かれたものだ夫から我輩は二人に斷つて私も參朝するからと云ふて赤坂の方から參內する向ふは紀尾井坂より行つた赤坂御所內の內閣に出ると凶變を知つて居るか今大久保公が殺されたと云ふことで實に意外千萬とも何と痛嘆の限り誠に殘念至極國家の大事變であつた卽ち此の時公が我輩に贈

られた手紙は眞に大久保公の絶筆である

大久保公薨去後七日有感　伊藤博文

千載眞知何處求　英雄去後氣如秋
連天風雨萬行淚　濺盡蜻蜓六十州

同

富貴浮雲我豈求　人間榮辱氣如清
大翁已逝君休嘆　長有威名動五州

一六六九　御巡行沿道の各縣に内示の大意

明治十一年五月十四日　（大久保家藏）

明治九年奥羽に
御巡行ヲ初メ一視同仁之御旨趣ヲ以引續全國に被爲及候筈之處昨年ハ國
事多端よして不被爲調候付當年北陸道
御巡行被仰出候抑
聖意之所在各地之風土人情民間之疾苦等を被爲知食天職を盡サセラル、
ニ外ならぬ候
一昨年早春減租之
聖詔も被爲在候分ゐ民費節略之御趣意ニ就ゐて御巡行ニ付民費を懸諸事
之設不致樣縣官ニおひて注意第一ニ候就中供奉之面々に饗應ゐまし爰事
一切無之樣前以厚可及内諭候事
一道路ハ難差置危嶮之場所ヲ除クノ外一切着手ニ不及事
一御巡行御日限定期被爲在候付各地に數日御滯輦ハ不被爲出來先中一日
ゐ御定めの事
一天覽之場所第一ニ勸業上第二教育上其他名所舊跡又ハ御遊覽ニ屬候場
所ハ可成被爲省候事
一行在所之ため新築等可爲無用事

【解說】是ヨリ先キ六月ヲ以テ聖上ニハ北陸道へ御巡幸アラセ

ラルヘキ叡慮アリ利通乃チ民情視察ヲ重ンセサセ給フ聖意ヲ拜シ沿道各縣ヘノ訓示案ヲ認メ十四日ノ朝議ニ之レヲ附セントシテ携サヘ參朝セシモノニシテ竟ニ清水谷ニ於テ兇刃ニ殪レシナリ故ヲ以テ原書ニハ處々當時ノ血痕ヲ留メ利通ノ君德培養ニ關スル最後ノ資料トシテ殊ニ貴重ナルヲ覺ユ猶ホ當時利通ハ三條・岩倉兩公ノ推薦ニヨリ聖德輔佐ノ任ニ當ランカ爲メ宮內卿ニ轉シテ侍補職ヲ統率シ伊藤參議代ツテ內務卿タルコトニ內定シ居リシニ偶遭難ノコトアリ元田永孚ノ手記之レカ事情ヲ語ルヲ以テ次ニ抄出ス

【參考】男爵元田永孚述「古稀之記」

明治十年八月二十五日宮中ニ侍補職ヲ置キ吉井・佐々木・土方・高崎等侍補トナレリ後十一年ノ春ニ至リ元田・佐々木等ハ相議シテ曰ク侍補ノ職タルヤ甚タ重大ナリ今後更ニ　聖德ノ盛大ナラムコトヲ望ミ奉ランニハ君側ニ其人ヲ得サルヘカラス宜シク大久保ヲ右大臣ト爲シ聖德補導ノ任ニ當ラシムヘシ若右大臣タルコト能ハサレハ宮內卿ヲ兼任セシムルモ亦可ナラムト遂ニ三條岩倉兩大臣及伊藤參議等ノ同意ヲ得テ之ヲ利通ニ謀レリ利通ハ右大臣ノ地位到底當ルヘキニアラスシテ固ク之ヲ辭退セシカ宮內卿タルコトハ微力ノ及フ所ニアラサレモ一身ヲ捧ケテ奉仕スヘシサレト兩省ヲ兼任スルカ如キ甚不可ナリ若大命ニ依リテ予カ宮內卿トナラハ內務卿ノ任ハ伊藤最モ其適任者タラムト答ヘタリ兩大臣伊藤ノ議モ茲ニ定マリ日ヲ期シ　上裁ヲ仰ク所アラントス予等之ヲ聞テ欣躍シテ大久保ノ來テ上座ヲ占メ與ニ共ニ心ヲ盡シテ談合セハ天下ノ事復患フルコト無ラント日夜之ヲ待シナリ五月十四日予侍補ニ約スル所アリテ高崎ニ至ル吉井ト會シ大久保ノ宮內卿トナルノ內議ヲ談ス常例八時進講ノ期限ナルニ由リ期ニ先立テ朝ス已ニシテ八時ヲ報ス　皇上出御乃進ンテ　御前ニ出

テ論語ノ一章ヲ講シ未タ二三言ヲ終ラサルニ堤書記官奔リ來テ　御前ニ出テ卽今大久保紀尾井坂ニ於テ賊ニ刺殺セラレ大變ナリト奏上ス予忽講ヲ止メテ起テ變ヲ奏ス　皇上容ヲ動シテ驚嘆シ玉ヒ未タ事由ヲ辨セス予乃退テ同僚ト議シ先ツ走ツテ大久保ノ邸ニ之イテ吊哭ス再ヒ參内シテ同僚ト此大變ニ當リテ處理スル所ヲ謀ル吉井後レテ朝セリ予問テ大久保ノ變ヲ知ル乎吉井曰知ラス予曰今朝云々ナリ眞ニ驚クヘク嘆スヘク天下ノ事如何眞ニ憂フヘキナリ吉井之ヲ聞テ茫然トシテ一語ナク椅子ニ伏シテ掩泣スルノミ天下ノ爲メ知己ノ爲メ吉井ノ慟哭察スヘシ翌日同僚集會シ相議シテ謂ラク維新ノ鴻業ヲ補翼スル者條・岩兩公ニ繼テハ西鄉・木戸・大久保三人今西鄉・木戸已ニ逝テ殘ル者大久保一人而已天下ノ大任ヲ擔當スルハ此一人ト賴ミタルニ今俄カニ此變ニ遇フ將來ノ事復他人ニ依ルヘカラス唯　皇上ノ宸斷ニ由ルヘシ願フ所ハ　聖上此變ニ當リ一層奮發萬機躬ヲ以テ親ラ裁斷シ玉フノ御誠心アランコトヲ依テ此議ヲ以テ建言セント衆議一決或ハ言フ先ツ兩大臣ニ告ゆ後言上スルヲ順序トスト然レ𪜈時變ニ處シテハ常例ニ依ラスト乃一同拜謁ヲ願テ　御前ニ到坐シテ上席ヨリ各々一人毎ニ眞衷ヲ吐露シテ更ル々々意見ヲ上言シ其要ハ萬機親裁ニ出テ臣下ニ御依賴ナカランコトヲ懇請セリ　聖上容ヲ改メ玉ヒテ各奇特ノ忠言深ク嘉納ス將來彌々心ヲ盡シテ助ケヨトノ親答ヲ賜ヒ一同感泣シテ御前ヲ退ク　聖上ノ御誠意既ニ此ノ如クナル上ハ天下ノ事復憂フルニ足ラスト皆共ニ眉ヲ開ケリ云々

一六七〇　濟世遺言　明治十一年

（福島縣令山吉盛典記）

明治十一年四月會議ヲ開キ各地方官ヲ招集セラル盛典等モ亦與レリ五月初旬會議局ヲ了ス時ニ内務卿大久保利通君大藏卿大隈重信君更ニ府縣知事令ヲ濱離宮ニ會シ要務ヲ告ラレタリ大藏卿ハ一千二百五拾萬圓ノ内國

債ヲ起スノ順序ヲ述ヘ且之ヲ募ルノ方法書ヲ示ス内務卿ハ内國債ヲ起スノ旨意ハ專ラ内國物産ノ興隆ヲ謀ルニ在ルヲ説キ且方法書ヲ示シ（此書中ニ縣下安積郡ノ事ヲ記セリ）知事令ノ懇議シテ其意見ヲ申白スヘキヲ令セリ五月十四日公變ニ遭フノ朝公ノ第ニ詣リ闢地殖産ノ事宜ヲ稟ス公之ト問對時ヲ移シ盛典去リテ公遂ニ朝ス他日盛典其詞ヲ記シテ一篇トナシ濟世遺言ト名ツク今之ヲ左ニ録ス

五月十四日盛典歸縣近キニ在ルヲ以テ午前第六時内務卿大久保君ノ邸宅ヲ訪ヒ談話時ヲ移セリ今其問答ヲ記スル如左

盛典曰　過ル日濱離宮ニ於テ示サレタル方法中華士族ノ爲メ特殊ノ保護ヲ加ヘ地ヲ闢キ産ヲ殖スルノ事アリ爾來各地方官ノ評論スル處ヲ聞クニ二族ト雖一般人民ト異ナルナシ二族獨リ厚キヲ加ルハ公平ニ非ス宜ク一般人民ト同一ナラシムヘシト小官愚考スルニ各地方官ノ執見ハ理ニ泥ミ實ヲ察セサルナリ若シ二族ヲシテ人民ト同視シ特殊ノ保護ヲ加ルナクンハ深ク恐ル數年ヲ出テスシテ窮困無告ノ慘狀ヲ呈シ餘毒ノ發スル處政府ノ力ト雖奈何スヘカラサルノ事アラントスルヲ試ニ之ヲ證セン管下若松士族ノ如キ戊辰以來無祿無産艱難見ルニ忍ヒス立産スル者十中僅カニ一二ナルニ過キス今ノ華士族ナルモノ速ニ其處ヲ得セシムルニ非スンハ後年若松士族ト同一ナランヿ火ヲ見ルカ如シ豈寒心セサルヘケンヤ故ニ示サルヽ所ノ方法ノ大旨ニ於テハ尤モ可トスル所ナリ小官見ル處各縣令ト異ナルヲ以テ敢テ意見ヲ述ヘ以テ前日ノ令ニ答フ公其レ諒セラレヨ

内務卿曰　足下ノ言然リ前日來各縣令來訪異見ヲ陳スルモノ比々雖然此事タルヤ既ニ

聖上非常ノ精神ヲ加ヘサセラレ且諸大臣ヨリモ懇篤ノ委任ヲ受ケタレハ決テ輕視スヘキニ非サル也抑華士族ノ今日ニ至レルハ固

ヨリ二族ニ罪アルニ非ス政府亦豈好ンテ爲ス處ナランヤ時勢不得已ニ出テ尤可憫ハ二族ニ在リ特殊ノ保護ヲ加ヘサルヲ得ス理論ニ拘泥スヘキニサ非ル也

盛典曰　各地方官皆謂フ開墾殖民ノ至難ナルハ古今同一ナリ今福島縣下猪苗代湖ヲ疏鑿シ安積岩瀬ノ兩郡ヲ開拓スル等甚タ好ム所ニ非スト小官愚考スルニ業ノ難キハ不待言ト雖決テ成シ得サルノ事ニ非ル也獨リ巨多ノ資金ト數多ノ年月ヲ要ス可ノミ抑此業果シテ成ルヤ其益五アリ湖水ノ水度ヲ減シテ沿岸ニ巨多ノ水田ヲ得ル一ナリ安積岩瀬二郡ハ從來水ニ乏ク其損害平均二分石數凡ソ二萬石ニ下ラス湖水ヲ灌注セハ直ニ二萬石ノ收穫ヲ增ス二ナリ二郡ノ原野凡六千町歩之ヲ闢テ殖民スルヲ得ヘシ三ナリ湖水ノ末流ヲ大隈川ニ合シ通船ヲ便ニシ本縣下白河郡ヨリ宮城縣下野蒜港ニ達シ北上川ニ接シ陸奥ノ中央ニ一船路ヲ開ク可シ四ナリ東磐城ノ海岸ヨリ安積郡ニ達シ若松ヲ經テ西越後ノ新潟港ニ至ルノ馬車道ヲ通シ陸運ヲ便ニスヘシ五ナリ此五益アリ豈爲サヽル可ンヤ

内務卿曰　福島縣下安積郡ノ開墾タル實ニ内國開墾ノ第一着手ニシテ則チ他日ノ標準雛形トモ稱スヘシ尤愼重ヲ加ヘスンハアルヘカラス事ハ内務省ニ屬スト雖殖産等ニ至テハ縣廳ニ委任スルハ論ヲ俟タサレハ今ヨリ殊ニ協力同心精誠以テ此業ヲ成スノ決心アルヲ要ス某等ノ存心如此而地方官亦能ク此精神ヲ體セスンハ大業ヲ成シ得ル能ハス足下其レ努力セヨ焉

内務卿又曰　抑開墾ヲ企望シタル所以ノ原因ハ海外諸國ノ形況ヲ傳聞シ且實見スルニ本邦ノ如ク肥沃ナル地味ハ絶テ之レ無シ又奥羽地方ノ廣原平野算スルニ遑アラス而一方ヲ回看スレハ無産ノ華士族アリ已ニ此民アリ此地何ソ闢カサルヲ得ンヤ是某ノ決心シテ疑ハ